

人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト

「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」

地球研ユニット：自然の恵みを活かし災いを避ける地域文化研究

Vol. 1
2023.3

地域文化を支える人・ 社会・自然のつながり

三陸海岸の里山・里海からのメッセージ

深町 加津枝 編



Vol.1
2023.3

地域文化を支える 人・社会・自然のつながり

三陸海岸の里山・里海からのメッセージ
深町 加津枝 編

地域文化を支える人・社会・自然のつながり

三陸海岸の里山・里海からのメッセージ

深町 加津枝 編

はじめに

吉田 文人 3

1. 三陸地域における里山・里海の暮らしと震災対応 深町 加津枝・大崎 理沙 4

2. 「スローフード気仙沼」の立ち上げから震災復興まで 高橋 正樹 46

3. 気仙沼「リアスの森BPP」と関わる自伐林家の意識 大崎 理沙・王 聞・深町 加津枝 66

4. 南三陸町における震災復興期の住宅移転と土砂災害危険区域の関係 三好 岩生・坂井 亜優 80

5. 空からみる三陸海岸の里山・里海 王 聞・中井 美波・深町 加津枝 98

6. 三陸地域の里山・里海の恵みと震災復興 深町 加津枝 110

著者プロフィール

はじめに

吉田 丈人

三陸海岸の里山・里海には豊かな自然の恵みがあります。また、地震と津波による災いを繰り返し経験してきた地域でもあります。自然がもたらす恵みと災いは一体のものとして、この地域の人々の記憶に刻まれており、地域の文化として継承されてきました。十二年前に起きた東日本大震災からの復旧復興は、地域の文化を再創造する営みともいえます。次の世代に受け継がれていく地域の文化をつくりなおす過程が、今まさに進行中なのです。将来の世代が振り返って今の時代を見たとき、地域の文化のルーツをどのように見るでしょうか。

三陸海岸では、海と山と里の自然がすぐ近くに隣り合っていて、いろいろな自然のつながりが一つの視界の中に広がります。また、海と山と里を生業の場とする人々も多く、さまざまにコミュニティで地域の人々がつながっています。自然と自然、人と人、自然と人の密接なつながりは、三陸海岸の地域の特徴であり、受け継がれてきた地域の文化でもあります。これらの密接なつながりが震災からの復旧復興に大きな役割を果たすことが、ここに収録されたいくつもの物語が伝える大切なメッセージだと思えます。多くの方に伝わればと願います。

三陸地域における里山・里海の暮らしと震災対応

深町 加津枝・大崎 理沙

里山・里海と関わった暮らし

里山・里海とは、「人間と生態系の長期にわたる共生的な相互作用によって形成された様々な生態系のモザイク」であり、かつ「人間の居住空間」であると、『日本の里山・里海評価二〇一〇』、すなわちJSSAにおいて定義付けされています。里山・里海は日本の伝統的景観・生活様式としてみられ、生態系と人間の共生的な相互作用を表してきました。今後、里山・里海の様々な生態系サービスに注目し、人々の暮らしや自然災害及び被災時の対応という観点から自然の恵みや脅威への向き合い方を考えることが重要となります。

本報告の対象地となる三陸地域では、リアス式海岸が発達した三陸海岸とその背後に広がる北上高地の自然の恵みを受けています。「いわての農林水産業 令和四年度版（岩手県農林水産部）」によると、岩手県における令和元年度の食料自給率は、カロリーベースで一〇七%（全国第六位）、生産額ベースで一九九%（全国第五位）となっています。食料産



図1 調査地 (Googlemap 地図データ ©2023 に加筆し作成)

業（農業・水産業＋食品産業等）の生産額（二〇一五年）は約一兆六一五億円となり、岩手県沿岸及び沖合は、黒潮と親潮に加え、津軽暖流が交錯しており、世界でも有数の漁場となっています。また、本州一の森林面積を有し、スギ、アカマツ、カラマツ、コナラ、ミズナラなど豊富な森林資源に恵まれています。三陸地域では半農半漁あるいは農林水産業が一体となった生活様式が見られ、里山・里海とともに生きる暮らしが営まれてきました。一方、歴史的に様々な震災を経験しており、津波被害が甚大となる地域でもあります。二〇一一年三月

十一日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）は、断層のすべり量が最大二〇（三〇m程度、マグニチュード九・〇）、最大震度七と我が国観測史上未曾有の規模となり、最大九・三m以上（最大遡上高四〇・五m）の津波が断続的かつ広域にわたり各地を襲いました。

本報告では、里山・里海そのものの大切さ、そして里山・里海とかわることの大切さを住

民への聞き取り調査の結果から見ていきます。調査は二〇一三～二〇一五年に行っており、里山としての自然資源利用としての事例（大船渡市及び陸前高田市の合計二世帯）、里海としての自然資源の利用としての事例（大船渡市内の二世帯）を対象としました。これらの事例は、里山・里海資源の利用が何らかの形でみられ、東日本大震災による家屋の被害がないもしくは軽微であったこと、また被災時に公営のライフラインが停止した世帯となっていない。調査内容として、主に二つの内容についてお話を伺いました。一つ目は普段の暮らし、里山・里海ライフスタイルの実態を知ることが目的としました。もう一つは、東日本大震災による被災時及びその直後の暮らし方についてです。当時の水や食料、熱源の調達状況などから、被災時の危機適応力を知ることが目的としました。対象とした世帯の方々による直接の証言を取りまとめた本報告から、里山・里海の空間や自然資源が日常の生活や生業に加え、被災時にもそれぞれの地域、世帯の状況に応じながら、柔軟な適応力で地域を支える大きな役割を果たしたことがみえてきます。

〈里山的自然利用 ― 大船渡市三陸町綾里下邸〉

二〇一〇年の定年退職を機に故郷の綾里りょうりに戻り、妻と自給自足的生活を開始しました。「人と自然をつなぎ、人と人とを、次の世代までつむいでいこう」という思いのもとにNPO法人「つむぎの家」を立ち上げました。地域のお年寄りやと柿剥き、茶摘み、郷土のお菓子を

作ったりする「お茶つこ会」を季節ごとに開いたり、地元の綾里小学校の児童へ田畑体験、里山体験のフィールドを提供したりしています。田畑では自然農法による栽培(家庭菜園)を行っています。冬季は所有する山林(四七ha)の里山整備(間伐など)を専門家二人に依頼して行っています。

● 普段の暮らしについて

水の供給は、水道水を生活用水として、沢水を農業用水として利用しています。食糧の供給については、田は約三反、畑は約二反(ビニールハウス三三〇㎡)、果樹畑は一反以上耕作しています。米は二人が五年以上食べる分は収穫できます。実質蓄えがあるのは三年前(古々古米)の分までです。モミで保存して、食べる分だけ精米します。しかしモミは



写真 1 所有する里山林の高台から望む畑と綾里の集落

かさばるので、特に地価の高いところではスペース節約のため、玄米で保存する家も増えていきます。しかしそうするとモミで保存しておくよりも品質が落ちてしまいます。モミだと品質を保ったまま保存でき、多少虫がついても問題ありません。畑では数十種類の作物を栽培しています。年や季節によって変動しますが、雑穀類はアマランス、ソバなどです。豆類は保存用と収穫時の食用と二種類あり、ダイズ、アズキ、ササゲ、インゲンマメ、スナックエンドウなどです。根菜類は、ゴボウ、ラッカセイ（今年はダメだった）、タマネギ、ジャガイモ、サツマイモ、キクイモ、ホドイモ、その他アシタバ、ヘチマ、食用ホオズキ、チャなどです。ビニールハウスがあるので真冬でも青物が食べられます。中で暖房を使うことはせず、太陽熱のみで温めているが、霜



写真2 綾里T邸

が下りません。現在（十一月）ビニールハウスにあるのは、シヨウガ、トマト、ナス、ピーマン、ゴーヤ、シシトウ、シソ（最近なくなつた）、コマツナ、ホウレンソウ、ハクサイ、キャベツ、トウナ、ナノハナ（まだ食べられない）、モロヘイヤ、シュンギクなどで多品目少量です。果樹園ではカキ・キウイ・イチジクなどを栽培しています。自宅で栽培したものは販売はせず、自家用です。そのため形のよさを求めず、生産性も重視しないため自然農法による栽培ができています。形が悪く、虫食いの多い野菜で虫も時折食卓に上がってきます。

自然農法では保存がきくように乾燥、塩漬、味噌漬けにするなど色々な工夫をします。保存がきくものとしてはクルミ、クリ、加工することによってイチジク（グラッセなど）、

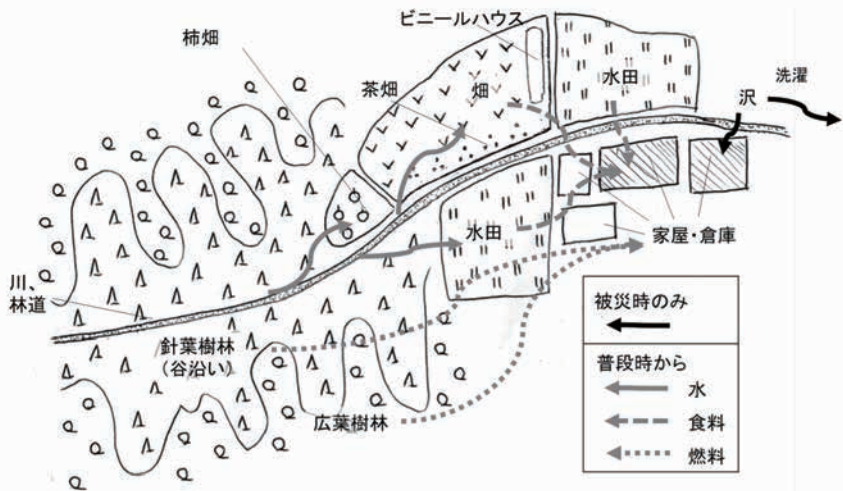


図2 「綾里T邸」における里山・里海資源の利用

干し柿、山菜（フキ、タケノコ）の塩漬（塩が浅いと腐れてしまう）などです。タケノコは自分の家の竹藪から、ホテイチクやワダケを収穫します。梅干・漬物はつくりますが、味噌や凍み大根、干し大根は作りません。食べ物にはこだわっていて、卵だったら平飼いの精卵を買っています。自給のもの以外はほとんど生協（週一回）から買っています。ほとんどそれで賄いますが、刺身などはスーパーで買います。この地域には小さなスーパーが二軒ありますが、魚類は扱っていません。なので魚が欲しい時は隣町の大船渡まで出かけます。農機具・物品の購入も大船渡でするので、少なくとも週二回は出ています。炊事・暖房等の熱源は、昔の炊事道具は使っておらず、現代のガス器具やIHを使っています。



写真3 Tさんが所有する里山林

●被災・震災の時にこころ

水の供給については、田んぼのために引水していた沢水を生活用水として利用しました。獣が利用しているなど衛生面で不安があるため、飲料用として使用する際は加熱して使いました。地域の人々にも広く使ってもらえるように水汲み場をセッティングしました。上流の水は飲料用に、下流の水は洗濯場に解放しました。どちらも途切れなく人がやってきました。食糧の供給については、米の備蓄はたくさんありましたが、電気がないため精米ができず困りました。ただし、精米してあった米に併せて電気の来るところで精米させてもらい、電気が来るまでの二か月間、滞在させてい

た十二人分を賄いました。ハウス栽培の野菜以外で被災時にあった作物としては、ハクサイ・ダイコン・サトイモ・ゴボウなどです。特にゴボウは、八〇〜九〇歳くらいのおばあちゃんに一日一回おじやを食べさせるのに、出汁が出るのでありがたかったです。太いものをスを外して使いました。被災時もハウス栽培をしていたため、ハウス裁



写真4 囲炉裏



写真5 被災時に地域の水場として利用された沢水

培をしていない家に青物があることを羨ましがられました。自分たちは被災者を受け入れていたため、被災者とは思いませんでした。よって被災届を出さず、支援物資のリストには載っていませんでしたが、家を失った姉夫婦を被災者として受け入れていたため、支援物資は色々回してもらいました。地区ごとに分け与えられていた支援物資も一応まわってきましたが、二週間ほどで配給は終わりました。その代わり、地域の人も、知人・親戚からの物資が届くようになったように、おすそわけが増えました。処理できる量を超え、家には食糧があふれるようになりました。また、「水のお礼に……」と物々交換でやってきた魚介類は、干物にしたり、醤油や味噌で漬けたり、保存

		3月11日	13	14	16	18	19	24	27	28	30	31	4/1	5月	6月	7月	8月																								
避難人数(人)		35	→												28	→												10	→												2
水	飲料水 生活用水	沢水を利用(地域に開放)																																							
熱源	暖取り・炊事・風呂用	囲炉裏 石油ストーブ ガス器具 薪炊き風呂(24日から地域に開放) ※薪の調達は付近の山林から																																							
食料	米 野菜 魚・肉 その他	前年度以前収穫のストックから 畑の白菜・大根・里芋・ごぼう等、ハウスものの青菜 冷蔵・冷凍庫のストック、貰い物(水のお礼や物々交換による)を保存食に加工 支援物資																																							
トイレ	汲取式 (地域に開放)	→																																							
備考		小学校卒業式を敢行 小学校がれき撤去 陸の孤島状態を脱する がれき撤去↓道路開通 行方不明者の捜索 頻発 津波が来るから高 台に逃げろと言われ 余震の 恐れから 放射能汚染の 情報 恐れから 屋内避難の 指示が出たり																																							
		電気復旧(電源車より) お糶分けが増える→処理 できる量を超え、家には食 料があふれる 若者らが宿泊代にとる 週間分の薪を割る 水道復旧 インターネット復旧 固定電話復旧 携帯電話が利用可能に																																							

図3 綾里T郎 被災時の動き(時系列)

がきく形にして、随時食卓に上っていました。(三月二十四日HPより)」

炊事・暖房等の熱源については、被災後電気は使えませんでした。ガスが使えませんでした。また、母屋の囲炉裏で暖を取りました。薪は所有する山林から調達していました。薪割りは重労働ですが、被災時は若者たちが宿泊代にと割ってくれました。お風呂は、薪炊きのお風呂を使用しました。コミュニティセンターに足を運び相談をし、ルールを決めて使ってもらうことになりました。利用時間は十三時〜十七時の間、一人(二組)三〇分。使用後は次の人のために使った人が水を足し、薪をくべるルールとしました。トイレについては、普段は新棟の水洗式のものを使っていましたが、被災時は電源

がなければ全く使えない。母屋の汲み取り式のトイレを使いました。地域の方々がトイレを借りにきました。

被災時には三日間三〇人の方が滞在、二か月間親族含めて十二人が滞在、姉夫婦が五か月滞在しました。台所だけで三〇名泊めました。敷布団は使わずに毛布だけ掛けて雑魚寝です。お年寄りには敷布団も使いました。布団のストックは二〇組くらいありました。被災後の対応は無我夢中でした。津波のことよりも、福島第一原発のことの方がずっと気になっていました。恐ろしいことであって、そちらへの恐怖の方が大きかったです。「地震から三日くらいは、情報が錯綜しました。大きな余震が続く中、津波が来るから逃げろという情報で、お年寄りを連れやつのことで高台に登った直後に、今度は放射能の影響があるから屋内退避、という情報が流れるなど、とにかくふりまわされて疲れました。(三月二〇日HP)」



写真6 綾里T邸 被災当日夜、囲炉裏を囲む人々 (Tさん妻撮影)

「地域コミュニティでの助け合い」としては、綾里の持ち味として、地域の連携協力が非常に強いことがあると思います。震災が起きて三日後には地域の人たちが自ら立ち上がってガレキの撤去を開始しました。十九日が小学校の卒業式だったので、津波で綾里小学校の校舎一階と体育館は全て使えなくなりましたが、地域民総出で十六、十八日にガレキを撤去し、十九日の卒業式を予定通り行いました。泥だらけになっているところを全部きれいにしました。実質動けたのは十三日からです。十三日は（未救助の人が）生死の境にあたるので、行方不明者の捜索などをしました。自衛隊がガレキ撤去のために来たが、地域の消防団員と建設業者が重機類を含めて協働作業できたので、自衛隊にはもっと被害のひどい地域に回ってもらいました（被害程度は綾里地区へ大船渡地区へ陸前高田）。そのため、自衛隊が（ガレキ撤去を）やったのはたった二日間でした。被災後三日後の十四日には、ガレキ撤去作業の成果で越喜来廻りの道路が開通し、陸の孤島状態を脱しました。

●その他

「伝承」のこころ」

講話と呼ばれる地震教育は小中学校で徹底されていきました。明治二九年六月十九日と昭和八年三月三日に大津波があり、毎年その震災の前後の日に校長から津波の話があり、体験談、高台に逃げるなど話されていきました。「津波でんでんこ」は、地震が起きたらテンデんこ。

とにかく高台に逃げろということでした。三陸地域の言葉で昔から言われています。明治二九年の大津波のときには綾里湾が当時で三八・二mという世界記録の津波が襲いました。今回の津波の高さは宮古湾で四二m、綾里湾で四〇・八mでした。

「気仙づくりの家屋」

この地区の老家です。築一四〇年の気仙づくりです。母屋は横十二間半、縦八間半。建物面積が約百坪とかなり広く、標準的な家の広さではありません。母屋については、一四〇年間の中で、台所を薪↓ガスに変えたり、風呂を付け替えたりと、適宜改装はしてきました。一〇年前には屋根の大修理も行っています。メンテナンスしないと一四〇年間もちません。今でもきっちり



写真7 綾里T邸母屋

住むことはできませんが、普段は新棟で生活しています。母屋には人は住まないの、耐震補強（義務制度）の対象外です。ただし強度はかなりのもので、この間の大震災では震度六はあったはずですが、食器も落ちずびくともしませんでした。昔ながらの寺院と同じように礎石の上に建物がとんと乗っているだけです。舟のようなもので、地震と共に動き、揺れを逃がすようになっていきます。間取りは、奥座敷十五畳、表座敷八畳、仏間四畳半、お上十八畳、お勝手十二畳、台所二〇畳以上（囲炉裏含む）、茶の間（玄関前）八畳、その周囲がずーつと廊下になっています。基本的に昔のつくりそのままです。ただし、土間は小さくなりました。昔は土間が四分の一ありました。今は五分の一ないのではないかと思います。また、この辺りはもともと小川の河川敷で、砂礫層の上に家が建っています。

〈里山的自然利用 — 陸前高田市生田N邸〉

十年ほど前まで東京で暮らしていましたが、テレビで里山の暮らしを見て「自分たちもああいふ暮らしをしたい。水のいいところに住みたい。」という思いが芽生え生田に移住しました。昭和三〇年代に建てられた古民家を借りて暮らしています。引越してきた当初は、外から移り住む人は珍しく、またLOHAS思想が流行っていたこともあり、よくインタビューを受けました。普段から田んぼを四a、畑を家庭菜園規模で耕作しています。畑の面積は広大ですが、そのうちの一部の土地しか使わず、雑草を刈ってそれを土の肥やしにする

ようなローテーションを組み、自然農法で作物を栽培しています。作物の種類は二〇種類です。震災前は養鶏やきのこ作りも行っていました。今はしていません。生出はもともと「炭の里」でしたが、現在、炭をエネルギーの主力として使っている人はほとんどいません。可能な限りの自給自足を目指しています。そのため公営の水道・ガスは使わず、電気代は月千円程度です。

● 普段の暮らしについて

水の供給については、生活用水は「わくわく」の湧き水を利用しています。「わくわく」から家までホースで水を引き、念の為、湯冷ましして使っています。真冬は水を出しっぱなしにして凍結を防いでいます。炊事・暖房等の熱源については、普段から炊事や暖房の熱源に薪ストーブ、カセットコンロ、七輪などを利用して



写真 8 里山林が広がる N 邸

います。七輪は消し炭を使って煮炊きを行い。洗い物や洗濯でお湯を使う際にも消し炭はよく使います。種火をもたせておけば使いたいときに利用できます。薪の調達については、近くの山から伐り捨て間伐材をとってきます。これは乾いているのですぐに使うにはもってこいです。これを斧で割って使います。

暖房用には雑木を使い、調理などで火力を一時的に上げたい時にはスギの材を使います。また、スギの葉はよい着火剤になります。トイレは汲み取り式トイレを利用しています。風呂は家にはないため、近所の「ふるさと分校」という宿泊施設にお湯をもらいにいっています。

●被災・震災の時にについて

水の供給は、わっくつぐの湧き水が三〜四日濁ってしまったが、大きなやかんなどに水をためておく習慣があったので、家にあつた水の備蓄を使ったり、濁っていないかつた沢水の家にもらいにいったり、しばらくためておいて上澄みを生活



写真9 わっくつ

用水に利用したりして対応しました。給水車の配給もじきに始まりましたが、沢水は十分にあり、沢水の方が塩素臭くなくてよいと感じました。食糧については、震災時米の備蓄はたくさんありました。しかし、大方モミの状態で保存しており、精米機が電動で動かすことができなかつたため精米された米の備蓄がもつかがどうかが心配でした。粳すりか軟式ボールとすり鉢で

きるといふ話を耳にしたので、それを試してみたりしましたが、米粒が割れてあまりうまくいきませんでした。結局、そのような手段を使わずとも何とかなりました。春先は畑で収穫できる作物がない時期でしたが、土の中にむろをつくり、秋に収穫したダイコン・ハクサイを保存していたものがありました。こうしておく回数か月は保存できるのです。ジャガイモなどの備蓄もありました。原発事故後は自粛しましたが、山に行けば山菜が採れました。養鶏をしていたため卵もありました。震災後は停電となり冷凍庫の中のもの融けるため、これを腐るまでに食べなければいけませんでした。長持ちさせたいが早く食べないと、という



写真 10 薪ストーブ

		3月11日	15頃	20頃	4月
避難人数(人)		受け入れなし			
水	飲料水 生活用水	汲み置きの水 → 湧口から取水 → (普段取水する湧口の水が濁ったため)			
熱源	暖取り・炊事用	薪ストーブ(ボイラー)、カセットコンロ、七輪、風呂は普段から近くの施設へ 反射式ストーブ(薪の調達付近の山林から、消し炭も利用)			
食料	米 野菜 魚・肉 その他	前年度以前収穫のストックから 畑の白菜・大根・じゃがいも・かぼちゃ・里芋・インゲン等のストック(冷凍品含む) 冷凍庫のストック(発泡スチロール箱で保冷) 卵(養鶏による)、頂き物の種類			
トイレ	汲み取り式	普段通り利用可			
備考		地域の消防団にて行 方不明者捜索・片付け 難者への炊き出し 婦人会による避 難者への炊き出し	避難者の手伝いを得 て臨時精米所の開設、 支援米・販米を供給 (積算650円ほど) 電気復旧	福島原発事故の情報 がはじめて入ってくる 電気復旧	固定電話復旧

図4 生出N邸 被災時の動き(時系列)

気持ちでした。冷凍品としては、肉・魚・
 収穫時に下ゆでしておいたカボチャ・サト
 イモ・インゲンマメなどがありました。一
 部は発泡スチロールの箱に雪をつめて冷や
 して保存しました。こうすると一週間程度
 はもちました。その他に缶詰の備蓄があり
 ましたし、物々交換する習慣があるので、
 頂きものの麺類もありました。物資の供給
 がいつくるのか、あるかどうかもわからな
 いため、食糧などの備蓄があってもセーブ
 しなければなりませんでした。

ライフラインは、震災十日後ぐらいに電
 源車が来て、電気が使えるようになりました。
 た。電話線の復旧には一か月程度かかりま
 した。基本的に電気が止まって困ったのは
 照明機能だけでした。照明がついたときの
 感動は大きく、心理的にほっとしました。

また、固定電話も携帯電話も使えなかったため、無事であったことを連絡しあうことが難しかったです。ラジオで「陸前高田壊滅」という報道が流れていたため、親が心配するといけないと思い、車で町に出て連絡を取りました。その後はガソリン節約のため連絡しないでいたところ、十日かけなかったら親に怒られました。携帯電話の通信サービスに関しては、使えたのは災害伝言板だけです。他のサービスはアンテナが被災するなどしてつながりませんでした。いざという時携帯電話は役に立たなかったです。ソフトウェアが臨時で設置したアンテナのそばで指定された機体で電話できる、というのはありました。ただし、長く通話で



写真 11 里山自然利用した暮らし

きるものではありませんでした。連絡手段は主に手紙か町に出た時の電話でした。

福島原発の状況については二〇日まで情報が入ってきませんでした。ラジオで流れているのは被災状況の報道が中心で、雨が降ってプルトニウムが落ちた、などといった放射能拡散の報道は聞きませんでした。

「地域コミュニティでの助け合い」については、被災直後から地域の消防団にボランティアとして参加し、捜索や片づけなどを行いました。消防団からいつ頃電気が復旧しそうかなどの情報を得たり、ガソリンを数ℓ分けてもらったりしました。常に酸素吸入が必要なお年寄りがいました。電気がストップすると装置が動かさません。そこで各家のガソリンを寄付しあって発電機を動かしました。どこの家でもチェーンソーを扱うため、ガソリンのストックがあったのです。



写真 12 N家の皆さん（左：筆者深町）

●その他「里山」

地域の人々は被災時に慌てる気配は全くなく、地域の底力を感じました。助けがこなくても自分たちで何とかしていけるだろうという自信があり、この先どうなってしまうんだろうというようなことは考えませんでした。山に行けば何とかなると思っていましたし、火の使い方、薪の扱い方（どういう材がどのように斧を入れたらどのように割れる、等）、鍋でのご飯の炊き方など、身についた生活の技術があります。普段から山を歩く際には、「何か使えるものはないかな」という気持ちでいます。昔は山の資源を皆が利用したため個人の割り当ては少なく、土地や肥やし



写真 13 近くの山の間伐材を薪にしている

にする雑草さえも取り合い、厳密に線引きをしていました。その頃に比べると、今は（人が利用しなくなった分）資源量が豊富で困りません。昔の方が資源事情は厳しかったと思います。現在の日本の人口が全員里山暮らしをはじめるとすると、資源量的にキャパオーバーでしょう。適正人口にならないと無理です。現在、手持ちの材料で創意工夫して楽しく暮らしています。移住当初は薪を伐り出すのに手のこを使っていたが、チェーンソーを使いだすと便利さに感動しました。文明の利器から離れた生活を送っていると、いざ使ったときになんて便利なのだろう、と感動します。

〈里海自然利用 ― 大船渡市大豆沢K邸〉

市議会議員をしつつ、漁業・建築業（工務店）を営んでいます。工務店については、現在は四〇代の息子が主力でやっています。家庭菜園をしています。被災時は避難所となった公民館の運営のため奔走しました。

● 普段の暮らしについて

食糧の供給については、米は二〇年ほど前以来の減反政策で田を売って以降作らないので、普段は七人家族の一年分五四〇kgを玄米で年一度買い付けています。畑は二反あり、主に妻がジャガイモ、サツマイモ、ニンジン、ダイコン、ハクサイ、ネギ、キャベツなどを作って

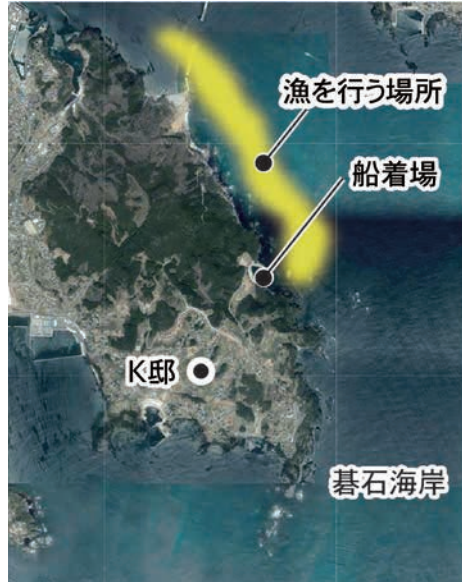


図5 大豆沢K邸 位置図
(国土地理院地図に加筆し作成)

縦型のものでそれぞれ二つずつあります（ストッカーは、家庭用冷蔵庫の冷蔵室が、すべて冷凍室のようなものと思っただけ）。

暖房については、ストーブは工場で使うため、放射式・だるま式など五〜六つ複数種類を持っていました。お風呂は、商売柄、自宅では薪風呂を使っています。薪風呂は煙が出るので、家屋の天井は真っ黒です。工務店では端材がたくさん出るのでそれを薪として使います。端材はゴミとして処理するなら産廃扱いになってしまい、経費がかかります。この辺りの地域の工務店では、端材を漁港の作業小屋に薪として寄付する店も多いです。

います。自家用であって販売はしていません。漁業は解禁物（くちあげ）を獲っています。ウニ、アワビ、ノリ、フノリ、マツモ（海藻類）など、遠方の親戚など、珍しがってくれる人に送ると喜ばれます。ウニ、アワビは販売もしています。このような浜のものは、海藻類は干して乾燥させて保存しますが、それ以外はストッカー（冷凍庫）で保存しています。ストッカーは箱型、

妻が嫁に来る前くらいまでは、囲炉裏があり、土間はもっと広く続いていました。今は、囲炉裏をつぶして掘りごたつにしています。囲炉裏の近くにイモ類・野菜を置くスペースがあり、これは囲炉裏の熱を利用したものでした。昔のお風呂といえば、鉄砲風呂や五右衛門風呂がありました。鉄砲風呂は、木の樽に鉄管がどんと立っていて、立ち姿勢で入る風呂です。薪の灰が舞い上がり、風呂に入っているのに灰をかぶることになるのが特徴的でした。現在は、昔ながらのものゝは田舎でもあまりなく、田舎のものゝがある、という感覚です。昔ながらのものゝが役に立った印象はありません。たとえば、昔ながらのものには餅をつく臼がありますが、これは役に立たないです。街中の木材が手に入らないとこ



写真 14 碁石海岸

ろなら、壊して薪にし、焚き火をするようなこと
もあるかもしれないですが、この地域ではそうす
るまでは皆追い込まれていなかったのです。都会・
田舎を問わず、「便利のいいもの」は普及していま
す。昔は、流行でもなんでも、都会と田舎にはか
なりの年数のブランクがありました。しかし今は、
情報化社会によって、今日都会であったことが即
座に田舎にも伝わってきます。そのため、便利の
いいものは田舎も何も関係ないです。田舎では古
いものを大切にするかというと、そういうわけ
もなく、やはり一度便利のいい生活をしてしま
うと、古いものは邪魔にしかならないのだと思いま
す。

また、「地域コミュニティでの助け合い」は、隣の人は何する人ぞ、ではないです。見え
ないくらい隣の隣の…家でも、家庭を知っています。「あそこのばっばはなんぞだったべ」と、
家が上がっていった様子を見ることができます。親戚でなくても、そのような人のつながり
が昔からあります。妻はこの出身ではありませんが、四〇年近くいると周りも親身になっ



写真 15 里山の幸

てくれます。地域コミュニティは大事です。普段はかえって、隣の人に声をかけられたりすると煩わしいこともあるかもしれないので必要ないです。都会でも会話などしっかりすればつながりはできると思います。地域コミュニティのつながりがあつてこそ、被災時のつらい状況でもがんばれる、というのがあります。大船渡の中心地では、コミュニティがこの辺りと同じように保たれているかどうか、というのはわかりません。地域によってつながりの深さ・度合いが違います。

●被災・震災の時間について

この地区は被災後三日ほど孤立しました。車道が寸断されましたが、徒歩でガレキを越えていくか、山中の獣道を利用することはできました。津波が起こったのは三月十一日十五時半〜十六時頃でした。地域の人が公民館に集まったのが十七時頃です。同時に炊き出しを開始し、おにぎりをつくりました。十二日、工務店という仕事柄所



写真 16 里海の幸

有していた薪の仮設風呂を公民館に貸し出し、以降は毎日公民館の避難者は風呂に入れるようになりました。薪風呂であったのがよかったです。他の工務店も仮設風呂を持っているところはありましたが、熱源が石油だったので使えなかったのではないのでしょうか。朝に公民館を覗き、それから町内をまわって夜に公民館に戻るような生活をしていました。妻は公民館で炊き出し・暖房等の世話をしていました。二人とも朝七時に家を出て、夜八時に帰ってくるような生活でした。

普段は爺さんが家にいますが、震災当日はデイサービスの施設に行っていました。道路が寸断されて帰ってこられなくなったため、三日ほどデイサービスに預かってもらう形となりました。結果的にその間は、家で社会的弱者である爺さんを一人にしなくて済んだため、その点については心配せずに二人とも家を空けていることができました。爺さんが帰ってきたのが四日目でした。股関節を折ったことがあり、半身が冷えてしまいやすいです。普段は電気毛布を使っていますが、被災時にはそれが使えず、寒い思いをしたと思います。反射式ストーブは油のストックの心配があるため一日中つけておくことはできず、そのため「寝てろ」と言うしかありませんでした。お湯を入れたペットボトルをこたつに入れたり、湯たんぽにして使いました。普段はアパート暮らしの長男夫婦・孫二人と夕食だけは一緒にこの家で食べられています。彼らは津波に関係のない地区に住んでおり、被災時は子供は学校で待機、親が迎えに行きました。

		3月11日	12	13	14	4月
避難人数(人)		受け入れなし				
水	飲料水 生活用水	自宅から50m離れた井戸より				
熱源	暖取り・炊事・風呂用	ガス器具 反射式ストーブ 練炭コンロ 薪風呂(薪は工務店の端材などから)				
食料	米 野菜 魚・肉 その他	公民館での食事・支援物資 (白米は寄付したためストック無し、玄米は電気がないため精米できず) 畑の白菜・大根・じゃがいも・さつまいも・玉ねぎ・キャベツなどのストック 冷蔵・冷凍庫のストックなど 支援物資など				
トイレ	汲み取り式(簡易水洗)	通常通り利用				
備考		地域の人が公民館に集まる 仮設薪風呂を公民館に貸出し 地元の人や、民宿に食材を避難所に寄付・分配 おじいさんがデイサービス施設から帰宅 水道の寸断により地区が孤立 水道復旧 電気復旧				

図6 大豆沢K邸 被災時の動き(時系列)

水の供給については、家から五〇m離れたところに井戸があり、それを利用しました。自宅にも井戸がありますが、モーター式(電気仕掛)のため被災時は使えませんでした。被災後は公民館(避難所)で過ごすことが多く、公民館には被災三〜四日後、道路寸断が復旧してからは支援助物資と併せて給水車が来ていました。食糧の供給については、米は震災二〜三日前に三〇kg白米に精米していたが、それは全て公民館に支援助物資として提供しました。普通だったら「茶碗こ」といって、各家庭からお茶碗一杯ずつくらいでカンパをもらうのだが、被災直後はそのような余裕がありませんでしたので。その結果、自宅で食べる米がなく困

りました。玄米はたくさんありましたが、近所の精米所は被災し、精米所が遠くにしかなく、精米ができませんでした。公民館に世話人として出ていたため、そこで食事を食べたり、避難所に救援物資として届いた米を、申し訳ないけれども思いながらわけてもらったりしました。畑は、被災時は畑に作物がない時期でしたが、野菜の備蓄がありました。イモ類やキャベツは秋に採れたものを畑に置いていました。ハクサイは新聞紙にくるんで保存していました。タマネギは吊るし干して乾燥させて保存していました。漁業は、震災時、ストッカーの中にサンマなどの魚類をはじめ、色んなものをストックしていました。これらが電気のストックにより融ける前に消費する必要がありました。もともと被災時の三月は寒かったので、それなりに日持ちはしましたが、一か月はもちませんでした。なお、ストッカーはこの地域の家では八割方置いていると思います。地域の魚屋や民宿の冷凍庫でも食材が融け、融けて食べられなくなる前に人に分けた方がよいということで、各避難所に寄付・分配されました。被災後三、四日後のことです。電気が長期的に來ないことを予測していました。また、つくだに、塩（づけ）にするなどの加工をして、日持ちを延ばす工夫をしました。支援物資には生ものがないのでそれらは重宝しました。

炊事・暖房等の熱源については、暖房は、ストーブは工場で使うため、反射式・だるま式など五〜六つ複数種類を持っていました。一つだけ反射式のものを家に残して、あとは全て公民館に持っていきました。被災後、プロパンガスが使えませんでした。都市ガスでなくて助かつ

たと思いました。反射式ストーブは炊事・暖取り両方に使えるため効率がよく便利です。加湿の目的でお湯を沸かしたりもします。特に被災時は、反射式ストーブの熱をいかに有効利用するかということを考えて生活していました。供給のめどが立たないなかでプロパンガスについてもストックの心配があり、そちらもむやみに使うことはできませんでした。練炭・練炭コンロを持っており、普段から長時間の煮炊きにはガスではなくこちらを使っています。浜から採ってきたヒジキを煮詰めるのなどに使います。十二時間ほど持ち、ガスより安上がりです。震災後、ファン式ではなく石油式のストーブが見直されています。オール電化や床暖房は近年流行っているが、停電の時には使えません。



写真 18 練炭



写真 17 練炭コンロ

お風呂は、被災時、水を井戸から汲んできて、それを薪で沸かしました。水は十八リットルのバケツで十杯ほど汲めば浴槽がいっぱいになります。避難所に持っていった仮設の薪風呂は、十二日以降朝から晩まで、避難者が薪の調達をし、お湯の番をしていました。薪の調達については、ガレキの角材等を拾ってきてチェンソーで薪の大きさにしました。チェンソーは被災しなかった家のものを使いました。お湯の番については、昼間避難者のうち若い人たちは職場に出るが、高齢者は公民館に残ります。公民館では特にやることなく、建物の中でじーっとしていたのも気が滅入るので、薪をくべて暖取りをし、井戸端会議をするような感じで風呂番を日中ずつと行っていました。昼間は避難者が減る（二〇世帯五〇人↓三〇人ほどになる）ので、その時間帯に近所の家が流されなかった人たちもお湯をもらいに来ていました。仮設の薪風呂があったため、碁石公民館への避難者は例外的に早く、毎日風呂に入ることができました。他地区では一週間くらいは入れなかったのではないのでしょうか。ライフラインは、電気の復旧は約一か月後で、水道はさらに遅かったです。復旧時期は地域差が大きく、同じような港町でも違ってきます。町の中心地に近いほど復旧は早いです。この地区は半島でありもつとも街はずれなところであるため、よそと比べると遅かったと思います。

支援物資等の分配については、支援物資は避難所に集まります。その一方で、流されなかった家は避難所に寄付をしたり、避難者の世話に回ったりするので、家を流された人よりも流

されなかった人の方がひもじい思いをする面もあったと思います。例えば、温かい食べ物や避難所の方が充実していました。昼に炊き出ししたものを夜にも出すわけにはいかないのです、自分たちは昼用のおにぎりを持ち帰り、夜の食事としてストープの上でアルミホイルに乗せて温め直したり、鍋で野菜と一緒に煮て雑炊にして食べたりするような感じでした。

また、家が流された人は流されなかった人のことを「被災者」と捉えておらず、食糧の確保に苦労して避難所に物資を分けずともらうよう頼みにいったとき、「これは避難所のもだから」といった旨の返答をされたことがあります。追いつまぬ余裕がなくなると、自分優先型の考えになってしまうと思われました。避難所に支援物資が有り



写真 19 碁石浜

余り、置く場所がなくなってきたらようやく分けてもらえるようになりました。

建物がなくなつた、被災のひどいなど生活を根こそぎやられたところに報道は集中しがちですが、家を流されなかつた人もライフラインが止まつているのであつて、間接被災者といえます。支援物資は避難所に送れば皆に行き渡ると考えられていました。仕方のないことではあると思いますが、家が流されて親戚の家に避難した人たちもいたと思います。

●その他「被災して感じてくるといふ」

震災後は議員として忙しくなり、以前は月に十日ほどあつた何も無い日が現在では五〜七日ほどになっています。今の時代、何につけても対応が速いという印



写真 20 聞き取りの様子

象を受けました。内陸での供給を制限して、被災地に優先してまわすことが行われました。いくつか挙げると、ガスはこの辺りにガス屋さんがなくても内陸から優先されて供給がありました。また、ガソリンについても、被災地供給を優先するため、盛岡で満タン入れてもらえなかったという話を聞いたことがあります。また、タバコも都内では販売に制限がかかっていたそうです。

東日本大震災は、広範囲にわたって被害が及んだことが特徴であると思います。阪神大震災や関東大震災が比較的局所的であったのに比べ、この度の震災では東北六県がやられました。被害規模面では関東大震災の方が上かもしれませんが。今回は沿岸のみの被災だが、もし内陸も共通した被害が発生したとすると、物資も何もこないでしょう。同じ被災状況であれば、都会の人が生き延びられない場合でも田舎の人は生き延びるでしょう。畑をするなど、自分が生きるための生活を自分で維持しています。都会の人たちは、供給されないとモノがありません。そうなると大変だと思います。

文明生活には弱さがあります。いざという時の生活力とは、どれだけ自然の生活をしているかということだと思います。参考として、戦時の集団疎開があります。都会から人が流入して、疎開された方は食い扶持が増えたわけですが、それでも何とか皆食いつないでいました。いいものは食べられなかったにせよ、食べ物は自分のところで作っているのです。疎開は戦禍を避けて行われていたものだが、田舎に食糧を頼むという面もあったのかもしれない。

今回は中心地（都会的、便利のいいところ）は被害が少なく、田舎部の被害が多かった傾向があり、中心地↓田舎への供給が行われました。もし逆のパターンの災害が起こった場合、どうなるのだろうかと思います。率直に言えば、都会生活でなく田舎生活だった故に都会（文明生活にどっぷり）と違った対応ができた、というのはいさぐらいありません。不便さの中で暮らしているがゆえにプラスになりました。田舎の便利の悪い生活をしていること、また世の中では、遅れている」というようなものが、被災時に役に立ちます。震災直後から多くの団体の支援をいただきましたが、学生さんのボランティアは毎日とっていいくらい来ています。

〈里海自然利用 ― 大船渡市泊里Y邸〉

代々漁師の家系です。ワカメやコンブを養殖し、ウニやアワビ、天然コンブの採介藻漁業を営んでいます。畑では家庭菜園程度の野菜を栽培し、稲作は行っていません。先祖代々、津波の脅威についての教えが受け継がれています。

● 普段の暮らしについて

水の供給については、もともと家屋が建っている土地は湧水が豊富な場所です。屋号が「タキノウエ」であり、地下水が豊富で湧いた水が滝のように流れており、その上に家を建てた

のが由来です。トイレは、浄化槽を利用しています。

●被災・震災の時間について

地震が起こったときは船の上にいました。妻は家の近くにいました。

・主人…丘が揺れる様子を見て、俺のうちはつぶれたと思いました。かつてない揺れであり、この世の終わりのような感覚がしました。あの揺れで動物的な勘により危険を感じない人はおかしいです。ワカメ小屋はバラックなのでつぶれないだろうと思いました。

・妻…家の近くで近所の人たち六人と談笑中でした。揺れは長く、立っていられないような感じで、地割れもしていました。家のサッシは一尺ほど行ったり来たりし



写真 21 Yさんからお話を伺う

ていました。実際は瓦は一枚も落ちませんでした。話していた人たちは全て高台に家のある人たちだったので、すぐにうちに帰れ、と言いました。

また、家族に海の近くに嫁いだり、土地の低いところで勤務しているものがいましたが、皆何とか逃げ、一族から亡くなった人は一人も出ませんでした。津波は海からの距離でなく土地の高さが重要です。家での教えが役に立ったと思います。娘は大船渡のここよりは内陸側に嫁ぎましたが、「海から遠いが海拔は1mだから気をつけろ」という旨を伝えていました。息子は被害の甚大であった陸前高田の郵便局に勤めており、死んだものと思っていました。郵便局長は仙台の人で、最後まで避難命令を出しませんでした。次男は



写真 22 敷地内から見る碁石海岸

避難した方がよい旨を進言しましたが聞き入れられず、職場放棄する形で逃げて助かりました。局長や、留まって仕事を続けた人は流されて亡くなったそうです。息子は最終的には車を使わず、路地裏を走って逃げたそうです。その際に、犬を抱いて「何かしら？」といった調子でお喋りしているおばさんたちを見たとのことでした。「津波でんでんこ」は、非情なようですが、家族だけでなく職場でも効果が発揮される教えだと思えます。明治時代は家財道具が現在と比べてずっと少なかった（長持一つ、たんす一つ）し、家屋の数も少なかったのでガレキの量が現在に比べてずっと少なかったそうです。また、明治二九年の津波のときは、流された家屋の木材は家屋の再建のために分け合って再利用しています。建材に使えないような端材のみ、薪としたそうです。現代はモノが多いため、ガレキが数万t、数十万tと出ます。明治二九年の被災時は、現在のように公民館のような避難所が



写真 23 魚を干す

なかったため、流されなかった家が流された人の滞在を受け入れたそうです。

水の供給については、普段は電気ポンプで井戸の水を汲み上げていますが、震災時はつるべで汲み上げました。また、井戸水は近隣に提供しました。なくていちばん困るのは水であると感じました。食糧については、備蓄、差し入れ（兄弟間での持ち寄り）、救援物資等があり、生きていく最小限はありました。1m×1mほどの冷凍庫があり、そのストックを融けてしまうものから消費しました。一部は干物にして日持ちを延ばしました。野菜のストックとしては畑で採れたダイコン・タマネギ・ジャガイモ等がありました。救援物資は、まず避難者が集まる公民館に供給され、その後家が流されなかった家へおこぼれがもらえるような形となっていました。娘夫婦の家は流されました。次男夫婦の家は流されはしなかったもののオール電化であり困ったため、その二家族も被災時は滞在しました。一か月程度は十三人分の食糧を賄っていました。甘いものが食べたくありませんでした。アメリカからの救援物資の中に甘いものが入っていました。炊事・暖房等の熱源については、被災当日は灯油ストーブを使用しました。住居から数十メートル離れ、少し低い地点にワカメの作業小屋がありました。津波で冠水しました。しかし、ここで使っていた薪ストーブを洗って、被災二日目に住居の土間に持ってきました。薪はストックがあったのと、ガレキの材木を利用しました。最近ではワカメ作業小屋でも薪ストーブではなく油（石油ストーブ）を使うようになってきてい




		3月11日	12	13	14	17	4/5	23	5/3
避難人数(人)		2 							
水	飲料水 生活用水	井戸水を利用(地域に開放)							
熱源	暖取り・炊事・風呂用	薪ストーブ、灯油ストーブ 薪焚き ドラム缶風呂  薪焚きのお湯で風呂  (薪の調達はストック+ガレキの材木)							
食料	米 野菜 魚・肉 その他	買い付けたもののストック・差し入れ(兄弟間持ち寄り) 畑の大根・玉ねぎ、じゃがいも等 冷凍庫のストック(漁で得た海産物等)→保存食に加工 支援物資							
トイレ	簡易水洗の浄化槽	上から水を流して利用							
備考		<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 15%;"> <p>難所として開放 晩に公民館を避</p> </div> <div style="width: 15%;"> <p>薪ストーブをわかめ 小屋から持ってきて 自宅で利用開始</p> </div> <div style="width: 15%;"> <p>応急道路の開通</p> </div> <div style="width: 15%;"> <p>寺の片づけ</p> </div> <div style="width: 15%;"> <p>地域の人で当番制で避 難所の世話が始まる</p> </div> <div style="width: 15%;"> <p>電気復旧(ドラム缶で沸 かした湯を電気ポンプで 家の浴槽に送るよう)</p> </div> <div style="width: 15%;"> <p>固定電話復旧</p> </div> <div style="width: 15%;"> <p>上水道復旧</p> </div> </div>							

図7 泊里Y邸 被災時の動き (時系列)

ます。薪ストーブの方が暖かいのですが、誰かが係として火の管理をしなければならず、その間仕事ができないので効率が良くありません。停電でご飯を炊くのに炊飯器が使えないのでロー鍋を使いました。普段、薪は古い家屋を解体するときに出る廃材を貰ってきたり、炭焼きを商売にする人から買ったり、自分の山から伐り出してきたりしてストックしています。お風呂は、井戸のそばにドラム缶を設置し、井戸からといを渡して水を入れ、薪をくべてお湯を沸かしました。男性はここで風呂に入ったが、女性は夜に体を洗う程度でした。電気が復旧してからは、ドラム缶のお湯をだるまポンプ(電気式)で住居の浴槽に送り、住居内で



写真 24 Y家の皆さん (右：筆者大崎)

風呂に入れるようにしました。每晚風呂を沸かしました。

ライフラインは、電気は四月五日、上水道は五月三日、固定電話は四月二三日に復旧しました。水道は汚水が入った水道管への対応などがあるため、復旧に時間がかかりました。灯りはろうそくが役に立ちました。子供たちの結婚式に使った巨大ろうそくが二本ありました。次男女夫婦の家はオール電化でした。停電で家が機能しなかったことを受けて、何もかも電気に頼るのはよくないと思いました。震災後すぐは携帯電話が少しだけ通じましたが、その後はつながらなくなりました。ラジオは聞けましたが、なかなか情報は入ってきませんでした。東京に住む姪や北海道に住む弟の方が被災地の状況をよく知っていました。家を流された人は避難所で届けを出す

ので安否が知れますが、家が流されなかった人の安否を知るのは難しかったです。息子の安否を確認する手段がありませんでした。また、自分たちの無事を発信するのも難しかったです。

「地域コミュニティでの助け合い」については、地震当日の夜には、家を流された人の避難所としての公民館が解放されました。辺りは皆顔見知りであり、地域コミュニティは強いです。十七日から当番制で公民館の手伝いが始まりました。十四日にはお寺の片づけを行いました。

(聞き取り調査結果を元に中井美波、大原歩が編集)



写真 25 神棚に祀る七福神

「スローフード気仙沼」の立ち上げから震災復興まで

高橋 正樹

気仙沼の水産業

気仙沼の産業は水産業です。金額では全国で九位、数量で十二位です。魚種はカツオやマグロの近海魚です。遠洋マグロ船では、おそらく船籍としては、日本で一番保有している港町だと思います。実際に消費されるのは東京が一番になりますので、静岡などから築地の市場に陸送されるのが多いですね。産地市場としてはカツオが毎年日本一になります。震災の年も日本一を守って、おそらく二〇何年間連続です。昔はサンマも日本一だったことありますが、今はカツオと近海のヨシキリザメというサメが日本一水



高橋さん



写真1 気仙沼市の里山・里海に風景（2022年）
提供：地域文化プロジェクト



写真2 気仙沼市魚市場（2019年）

揚げがされています。サメからとれるフカヒレの生産量も日本で一番です。しかし、フカヒレは料理されるのは横浜や大阪、神戸の中華街ですので、地元ではあまり食べられません。料理人がいませんので。

私は中学を出て高校から東京に進学しました。エネルギー、ガソリンスタンドを中心にやっている家業がありました。大学を出て社会人になって、地元に戻るかどうかすごく迷いました。社会人として都会の生活をしてみて、都会のただの歯車になるのは嫌だなと、いろんな人と関わって生きて証を残して死にたいと思うようになりました。都会でも生きて証を残す人はたくさんいますけれど、そこまで僕に力があると思えなかったもので、できれば田舎で生きて証をがちり残したいなど、そんなふうにして気仙沼に帰りました。

戻った気仙沼の特徴ですが、自然があつて、今話したような水産業があつて、どこにもある田舎町です。でもせっかく帰ったんですから、田舎をどうやって田舎らしくいい町にするか考えました。リトル東京にしたいというのではなく、どうやって田舎の良さを残しながら、寂れていく感ではなく、田舎として輝いていけるか、帰ってから三〇年になりますけど、挑戦をしています。

「スローフード気仙沼」の立ち上げ

例えば食べ物であれば、北限に位置するユズの生産地にもなります。米の味が日本一おい



写真3 里山・里海の恵み

しいと言われたこともあります。気仙沼は米処ではないんですけど、宮城県は米処で、その中でも味の品評会をすると、気仙沼の米が一番になったりすることもあって、水産業だけではなくいろいろ掘り起こせば輝くものがたくさんあるなというのが帰った時の感想でありました。都会からより離れているからこそ残っている良いものが結構あるなど。最終的には、この水産業と外から人を呼び込む観光、それからスローフード。食べ物を中心の、その背景にある自然であるとか文化であるとか、そこに生きている人の価値観であるとか、いろんなものがこのスローフードという概念に入ります。そこにある食べ物を含めた、いろんな文化を後世にまでちゃんと本物として残そうというのが、スローフードの根本であります。これで町を再生していくしかないなと思って、二〇〇一年にスローフード協会、「スローフード気仙沼」を立ち上げました。

「スローフード気仙沼」の活動

震災の年に一〇回目を迎えようとしていた子ども料理コンテスト、「プチシェフコンテスト」がありました。審査委員長は三國清三という、東京四ツ谷のオテル・ドゥ・ミクニという、沖繩サミットのとときの総料理長だった人です。この方に第一回から審査委員長でずっと来ていただいています。食育、あるいはESD、持続発展教育を文科省が推進していますけれども、ほとんどの小中学校がESD教育をやっていて、ユネスコスクールにも認定されて

います。地産地消一〇〇%の給食など、気仙沼では食を中心にいろんなことに取り組んでいます。コンテストも行われて、震災の後も、その年と次の年の年は休みましたけれど、十一回目、十二回目と続いているところです。

二〇〇四年のスローフード協会の立ち上げから三年たったところ、活動が国内で評価され、世界で初めて開催された魚食の祭典、スローフィッシュinジェノバに日本代表で気仙沼の食文化を紹介しに行きました。日本ブースでは単に食べ物を出展しただけでなく、食べ物の裏側にある文化、魚は骨まで食べる、皮までハンドバックにして使うとか、日本古来の万物神々に感謝する心などをパネルにし、物産品と一緒に展示をしました。大漁看板や大漁旗などの文化も一緒に紹介してきました。三〇〇くらいのブースが世界中から出ました、その中でも人気を誇って毎日盛況でした。



写真4 プチシェフコンテスト (2010年)

二〇〇八年にはスローフード協会が中心になって、気仙沼の良さをどんどん発信するガイドブック「まるかじり気仙沼」を作りました。気仙沼の歴史・文化・伝統・自然はもちろん、産業や食べ物、飲食店のグルメマップも掲載されています。自分たちで一生涯懸命作りました。被災して町がなくなってしまうので、飲食店もほぼ八割九割ないんですけどね。でも、復刻版を作ったほうが良いと言って支援をしてくれた方があって、前の町の形のままで復刻しています。最終的に町が再生したらもう一度作り直すということになります。

スローフードフェスティバルの開催

スローフード協会を設立して六年たった二〇〇七年の真冬、山の中にある廃校に



写真5 スローフィッシュ in ジェノバ (2007年)

なった小学校の校舎を使ってスローフードフェスティバルを開催しました。スローフードの運動は外で評価されていましたが、足もとの住民がスローフードって何のことなんだというのが聞こえてきました。地元で十分な理解を得られなかったところもあって、地元の方々の理解を深めるフェスティバルの開催を決定しました。

当日は子どもたちが持続発展教育の成果を発表し、漁業者や農家などの講義がありました。代々受け継がれている郷土芸能の踊りの発表会も同時に行われました。カットの下ろし方、漬物の付け方、山菜のとり方などの授業もありました。海の幸、山の幸やそれらの加工品もたくさんでて、市民文化祭を山の中でやったような感じでした。見る・聞く・触る・味わう・感じる、



写真6 スローフードフェスティバル（2007年）

学校形式で一時間ごとにチャイムを鳴らしながら、五感でスローフードを感じていただく、理解してもらおう、そんなイベントでした。

フェスティバルを開催した八瀬の学校は気仙沼の山の中にあります。このフェスティバルを企画したときに、地元集落へ行き代表者一〇人くらいに説明しました。何人くらい人を呼びたいんだと聞かれたので、千人くらいは集めたいという話をしたら「真冬の八瀬をなめるのか？」と大笑いされました。最終的には、二日間一万人の人が二月の八瀬に集まりました。反対もありましたが、本気度が分かったら一緒にやってくれました。校庭での炊き出しや餅つきをやる団体が来たり、薪割り体験、小屋での炭焼きも行われ、歩くところがないほど大盛況で終わりました。

それから四年たった二〇一〇年秋、もう一度市民に向けて理解を深めようと、今度は町でスローフードフェスティバルを開催しました。寂れ始めた商店街の再生のためのフェスティバルです。シャッターの閉まった空き店舗を借りて店舗にしたり、シャッター前にテントをはって歯抜け状態がないようお店を並べました。道路の真ん中に軽トラでものを持ってきたり、商店街で売り出しをしたり食べ歩きができるようにお願いしました。昔の気仙沼の様子を八皿映画で上映し、子どもたちの発表会も空き店舗を利用して行いました。各集落で受け継がれている「大漁歌い上げ」という郷土芸なども披露し、二日間で二万人集まりました。二日間、みんなで気仙沼の良さを楽しみました。

二〇一一年の正月を迎え、町や商店街、山のみなどで目指す方向が見えて、やればこれだけ町も活性化する、いろんなことが出来るなど自信を深めました。山も海も揃い、ようやく光り輝く町に向けいろんな人の気持ち、ベクトルが揃ったところでしたが、そこに突然あの三月十一日がやってきました。

震災復興の課題

震災当初を振り返って課題を整理したいと思います。全部被災しましたから、全てを修復しなければなりませんでした。優先順位がいろいろあり、同時に全部直せないで、優先順位で苦労したなという感覚があります。目の前の生活が大事なのか、今後とも長く生きていくためのものが優先さ



写真7 東日本大震災の被害（気仙沼市内）



写真 8 東日本大震災の被害 2011年4月6日撮影



写真 9 東日本大震災の被害 (気仙沼市内)

れるのか、年代によっても違ってきますし、どれも大切で優先順位が付けられないんです。子どもにとっては教育とかコミュニケーションとか医療とかも大事ですけど、今食べるごはんも大事です。でも今ご飯だけ大事にしていると、明日、明後日、皆食に困るよと。産業がいつまでも復旧しなかったら困るよねなどと、いろんなものが入り乱れて優先順位を迷うのが一番最初だったなと思います。

今回の災害は流されて失ったものだけではなく、マイナスになってしまったものがあります。例えば地盤が津波で流され、さらに地震で七五cm沈下しました。復旧なので下がったところをどう直すか、直してから振り出しに戻さなければなりませんでした。もともと防潮堤なんてなかったんですが、次に来た時に備えて防潮堤をどう整備するのか、防災体制で常にそのことを考えてスタートしなければいけなかったのです。

非常時の情報共有あるいは復興計画は一部の人で考えることになりました。だから後の人がついていけない、情報共有ができない、しらけてしまうことがあり、やっぱり出ました。震災の後、テレビや新聞がない状況だとなおさらそういうことが進むことがわかりました。

復旧と復興どっちが先なんだという議論もありました。復旧すら進まないのに復旧したところがさらに復興を進めようとするとやっぱりかみかみでたりするんですね。でも、どこから進められるところから進めないと、全員が復旧してから、じゃあ次は復興だなんてことはないわけです。やれるところからやっていくと、やっぱりいろんな感情が出てですね。こんな人

間的な些細なことが大きな問題になるんだなと感じました。時間と共に地域差、同じ気仙沼の中でも中心になるところと外れるところがあります。産業も水産業ばかり何でというような想いがある一方、水産業がリードしないとそれにつながる産業はやっぱり復旧できない。不公平があるような無いような、そんなことがたくさんあったなという感じであります。

地盤沈下の問題

地盤沈下で七五cm下がったというのは感覚としてわからないと思うんです。道路は満潮になると潮の満ち引きで水浸しになって、一部のエリアに行けなくなるので、自衛隊がいる間に早々に二mくらいかさ上げして新たな道路を作りました。震災時にはなかった道路をかさ上げて作ったんですね。この写真10、11の水があるところが高さなんです。地盤沈下したために満潮で〇m地点のエリアです。七五cm下がったことは普通に海の水が上がってくると、浸水エリアになるということです。干潮になると引いていくんですけど。一日に二回満潮ってあるんですね。そのたびに自分の家がどんどん水に埋もれていって、満潮になると上の道路のあたりまでひたひた水が来るんですね。かさ上げた土地には工場や家が建っていたんですが、地盤沈下ですっかり海の中にあるみたいです。

地盤沈下すると、満潮のとき陸地でなくなりますから、沖ノ鳥島とかと一緒にですね。国土がなくなったということなんです。当然その土地の所有者もいたわけですから、日本の国



写真 10 地盤沈下の影響（海岸沿い）



写真 11 地盤沈下の影響（市街地）

土がなくなったら国が直してくれると思っていました。でも、予算措置、法律で地盤沈下で国土がなくなるなんて言う概念はないんですね。こういう天災があった時にそういう概念がないので、できないということの意味します。かさ上げは自分でやりなさいとなっても、あんな被災して家も流されている人がそんな財力あるわけありません。

四年たつても法が整備されているというわけでなく、多分同じようなことがあつてもかさ上げは法律上できません。国土を喪失しているのにそういう状況なんです。個人でやれと言われたら、町の中に自分でかさ上げできる人とできない人がいますから、町の中が凸凹になつてしまうわけですね。本当にそれでいいのかというのは今も問題として残っています。エリアとして区画整理事業をやつて、全部国で市で地盤をかさ上げしてくれるエリアも出ましたけれど、いずれこの問題は根の深い問題になると思います。

災害復興のための補助金

国の制度は平常時のルールが多いんですね。国の支援制度、基準は全部平常時を前提にしています。いろいろな省庁が被災地を助けようとしてくれましたが、結局現状の平常時の制度から脱することが出来ていないのです。例えば、水産庁でかさ上げをこのエリア全部していいとなつても、このエリアは水産庁がやるんだから水産関係者だけですよというのが必ず付くんですね。平常時はそれでいいんですね。復興のため大きなかさ上げエリアをとろう



写真 12 区画整理・住宅整備予定地 (2013 年)



写真 13 区画整理・住宅整備予定地 (2015 年)



写真 14 水産加工団地予定地 (2013 年)

としたりくても、そこに住宅は作れない、コンビニも作れない、でも工場は作っていいとなります。一haも二haも工場が続いていて、その中でご飯食べたいと思っても、お弁当を買いに行くのにえらい遠いところまで行かないといけません。水産庁の助成対象でないところでコンビニ作ろうと思うと自分でかさ上げしてくださいとなるんですね。

グループ補助金は四分の三補助金を出して被災した商店街などを救ってくれるんですけど、上物を建てる補助金は出ても地盤沈下を直すのはないのです。地盤が直らないのでいつまでもお金が使えない。たぶんニュースでこんなに復興予算ついているのに一〇%しか消化していないっていうニュースを聞いたと思うんですけど、それはこういうことなんです。自分でかさ上げしてやった人もいますが、後に



写真 15 水産加工団地予定地 (2015 年)

補助金が出てかさ上げできるとなると、なんだちよっと待てばよかったなとなるわけですね。そういう明暗や不公平もあり、補助金がついても使えない状態があります。補助金の案内は国や市から来ますが、急だったりあるいは平常時のルールになり、年度年度でお金は使いきってくださいとなるんです。

土地の区画整理だけで二年も三年もかかるのに補助金は単年度ごとで、ずっと不安なままでした。手続きも大変です。災害時の特徴として、工事の時期がみんな集中し、工賃が上がってもととの補助金の額ですまなくなります。行政で入札を出しても、その値段ではできないとか、工事が進まない要因がたくさんでていきます。平常時のルールの弊害がたくさんあるのが被災地であって、次の災害をあまり考えてはいけないのかもしれませんが、日本は阪神淡路に続いて

東日本大震災を経験したんですから、被災時に適応される制度を整備すべきじゃないかなと、いろんなところで話をしています。そうすれば僕らのようにはならないと思うので、平常時ではない時に使えるルールの整備もしたほうが良いと思っています。

おわりに

震災後、いろんな方が出入りして、いろんな支援策を持ってきてくれました。中には、商売の提案に来ている企業もありましたけれど、たぶん普通の気仙沼に戻ったら、そんな話はないと思います。超少子高齢化はもう目の前まで迫ってます。三〇%だった高齢化率もつと、もつと上がっていくと思います。支援の手がいろいろあるうちに、その方たちと補助金も取りながら利便性、住みよさを上げ、町がつぶれないでやっていく方法はないのかと考えました。そして「住みよさ創造機構」という団体をたちあげました。市長が顧問で、商工会議所の会頭が理事長、僕が専務をやっています。僕が聞き役になって、そういった一般の企業さんからの支援を気仙沼市とドッキングさせて、田舎町でいろんなプロジェクトを起しているところなんです。今五つほどプロジェクトが動いています。去年十一月にたちあげて五つ目ですから、この一年、二年で一〇、二〇くらいはやりながら、復興と合わせて挑戦していきたくと思っています。最終的にはこの町が持続可能な町だねって言われるような、人口は六万人と少ないけれど、持続可能だと言われるような町にしたいです。そんなふうに思っ

て残りの人生、あと一〇年か二〇年かわかりませんが、頑張っていきたいと思えます。ご縁がある方は気仙沼に思いを馳せていただいて、遊びに来ていただければ幸いです。

(二〇一五年六月十六日 京都大学における講義を元に深町加津枝が編集)

気仙沼「リアスの森BPP」と関わる自伐林家の意識

大崎 理沙・王 聞・深町 加津枝

「リアスの森BPP」に関わるバイオマス材の供出

宮城県気仙沼市は三方を山に囲まれ東側が湾に面しており、浜側は漁業や養殖業、山側は炭焼きなどをかつての生業とし、浜と山の間で交易を行ってきました。豊富な森林資源がある里山が広がっており、森林は主にスギ林、アカマツ林、広葉樹林で構成されます。市内では、「リアスの森BPP（バイオマスパワープラント）」という、地域の材の供出から熱電供給まで一貫して行う木質バイオマス事業が行われています。「リアスの森BPP」は、気仙沼地域エネルギー開発株式会社を事業主体とし、林業関係者、行政、地域金融機関など多様な主体が協働しています。森林整備により流域内の里と海を豊かにすることで、森里海のつながりを時代に即した新しい形で再生させることを掲げています。その挑戦にあたっては、古くから里山の資源利用を行い、その技術を洗練させてきた経験が下支えになっています。

「リアスの森BPP」にバイオマス材の供出を行っているのは、主に自伐林家、林業生産

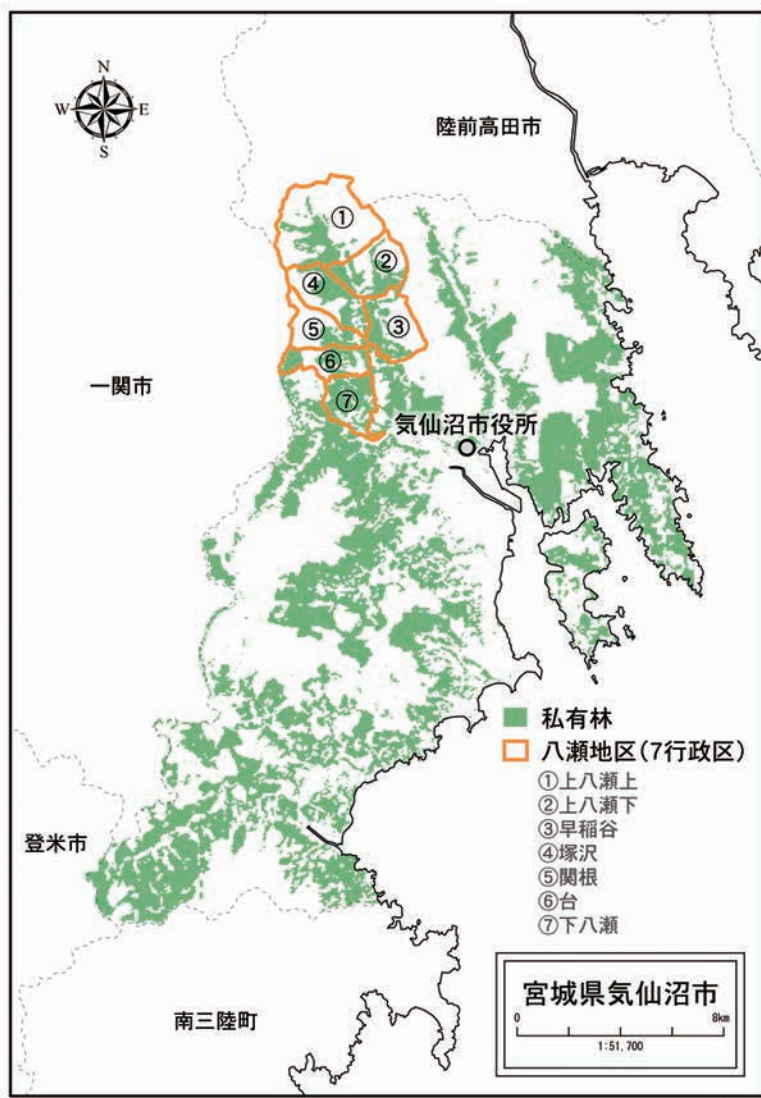


図1 気仙沼市の私有林の分布 (2015年現在、宮城県森林所有形態別地図を加工)

組織であり、自伐林家は、所有する森林などから自力で材を伐採・供出します。バイオマス材供出の個人登録は一二四名であり、団体登録は四団体の合計一二八名・団体です（二〇一五年現在）。材の買取が開始された二〇一二〜二〇一五年度に供出実績があったのは七八名・団体でした。個人登録をした気仙沼市内在住の自伐林家は一一八名（九五％）であり、団体は林業生産組織となる森林組合二組と材木店一社の計三団体に加え、八瀬地区住民を中心とした団体である「八瀬・森の救援隊」（メンバーは一〇人ほど）があります。二〇一四年十一月に結成された任意団体であり、主に部分林（分収を目的とした気仙沼市有の集落共有林）の間伐材をバイオマス材として供出しています。

図1は気仙沼市の私有林の分布を示します。私有林が市内全域に広がり、八瀬地区（旧気



写真1 「八瀬・森の救援隊」の活動



写真2 八瀬地区の里山



写真3 塚沢八雲神社周辺の里山（八瀬地区）

仙沼市北西部）では高い割合で分布しているのがわかります。八瀬地区は、上八瀬上、上八瀬下、早稲谷、塚沢、関根、台、下八瀬の七行政区を合わせた地域です。写真1は「八瀬・森の救援隊」の活動の様子です。写真2、3は八瀬地区の里山の景観です。写真4は八瀬川の様子です。自伐林家によるバイオマス材の供出量は旧気仙沼市域に集中しており、唐桑町

域や本吉町域からのバイオマス材の供出はあまり多くありません。気仙沼地域エネルギー開発株式会社の代表と八瀬地区の住民は、「スローフード気仙沼」の活動などを通じたつながりがあったことから、事業開始当初から、バイオマス材を供出する体制が整ってきました。

八瀬地区の自伐林家

「リアスの森BPP」のために結成された「八瀬・森の救援隊」がある八瀬地区の自伐林家の状況や供出意向などを把握するため、二〇一五年十二月末～二〇一六年一月初旬にアンケート調査を行いました。アンケートに回答した自伐林家は合計二一名、年齢は六〇代が六二％、七〇代が二九％を占め、五〇代は九％となっており、六〇代に集中しています。自伐林家の所有する山林面積（図2）をみると、五ha未満が二九％（六人）、五～一〇haが二四％（五人）を占め、五〇ha以上が一〇％（二人）でした。



写真4 八瀬川の様子

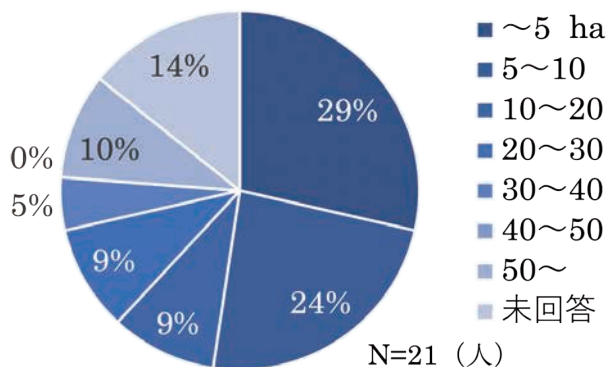


図2 所有する山林面積

所有山林の林種については、スギ林（十九人）が最も多く、次いでアカマツ林（九人）、広葉樹林（六人）でした。バイオマス供出対象林の林種については、スギ林（十四人）、広葉樹林（三人）、アカマツ林（二人）でした。所有山林の林種よりもバイオマス供出対象林の林種の方が、アカマツ林、広葉樹林と回答した人数の全体に対する割合が大きく減少しています。このことからスギが選択的に伐採され、アカマツと広葉樹は供出は敬遠されがち傾向があると考えられます。理由として、スギ材は比較的集落や林道の近い立地に存在するため搬出コストが低く、建材として他の二つより高値がつくことが挙げられました。

自伐林家所有山林の林種別面積合計からは、広葉樹林（一一・六・二ha）の面積が最も大きく、次いでスギ林（九三・三ha）、アカマツ林（三七・三ha）、その他（一三・五ha）でした。スギ林は市域において蓄積量が最も多く、

流域環境にも影響を与えやすいため、今後も継続的な供出を行い、可能であれば供出を増やすことが期待されます。アカマツは古くから建物の梁材などとして利用されてきましたが、外材輸入による国産材の下落や、伝統工法で新築する家屋の減少などを理由として需要が減少しています。需要

減により市場価格は下がったものの、搬出に当たっては林道から外れた尾根沿いに分布する点、枝の付き方の関係で伐倒が比較的難しい点（危険性が伴う）等からコスト高のため、間伐の促進が難しい状況です。最近、気仙沼市域ではマツ枯れが広がっており、市域で大きな面積を占めるアカマツ林の利用がさらに難しくなります。アカマツ材の希少価値を生かして販路を確保し、併せて規格外の材をバイオマス材として活用するなどの対策で経済的な価値



写真5 アカマツ林からの材の供出

を生み出す仕組みの構築が早急に求められます。写真5は供出対象となったアカマツ林の様子です。広葉樹林には薪炭林として利用されてきた歴史があります。一九六〇年代のエネルギー革命が起こる以前は、薪や炭といった木質燃料が広葉樹林から調達されましたが、搬出コストが高くなるためスギに比べると面積の割に供出量は落ちます。今後「リアスの森BPP事業」で広葉樹が利用されることが期待され、いかに上手くカスケード利用を行えるかなど検討する必要があります。

自伐林家の森林利用と林業技術

気仙沼地域エネルギー開発株式会社は、自伐林家の育成を目的に講習会やフォーラムを開催しています。アンケートに回答した自伐林家のうち、講習会を受講した人は十二人、受講していない人が九人でした。講習会やフォーラムについては、受講者十二名のうち十一名が、そこで身につけた林業技術が現在「役に立っている」と回答しています（一名未回答）。講習会・フォーラムを受講しなかった九名については、その理由に関して「日程の都合が合わなかった」と答えたのが五名と約半分を占め、残り四名については「間伐に必要な技術はもともと持っており受講の必要がなかった」と未回答が二名ずつでした。今後追加で講習会やフォーラムを開催した場合、以前参加できなかった層も集められる可能性があると考えられます。

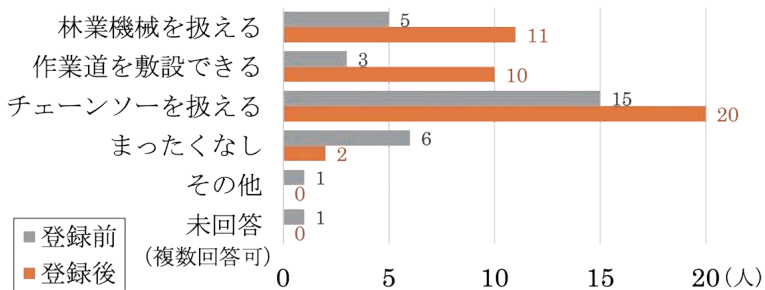


図3 買取制度登録前後の林業技術の有無

買取制度登録前後、すなわち本事業において自伐林家として供出を始める前と後で山林所有者の林業技術がどのように変化したかについて検証しました。図3に示したように、林業機械の扱いと作業道の敷設については、供出開始後は供出開始前よりも二倍以上「できる」と答えた人数が増えました。チェーンソーはもともと扱える人が多かったため伸び率は小さいが、アンケート対象者全二一名のうち二〇名が登録後は「扱える」と回答しており、ほぼ全員が取り扱い技術を身につけていることがわかりました。供出開始後の自伐林家の林業技術の向上については講習会やフォーラムの成果が寄与したところが大きいと考えられ、今後も積極的に開催することで山林所有者の新規参入の促進や、自伐林家のさらなる林業技術の蓄積に役立てられると考えられます。

次に自伐林家がバイオマス材供出開始前から備えていた林業技術について、森林資源の利用経験を把握しました。図4に示したように、「薪・炭の生産」について二〇名が経験有りと回

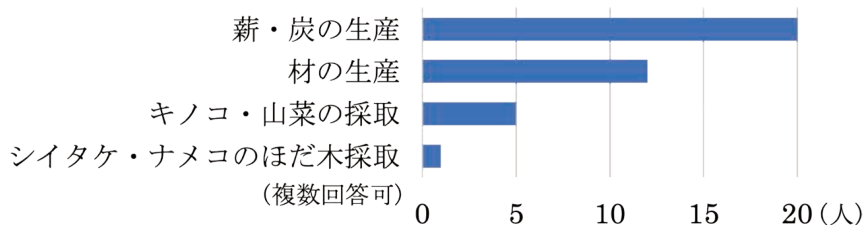


図4 経験してきた森林利用

答したことから、薪炭の生産についてはほぼ全ての対象者に経験がありました。「材の生産」(スギ、ヒノキ、マツ、広葉樹のいずれか)に経験有りと答えた数も十二名と過半数に達しました。その他は「キノコ・山菜の採取」や「シイタケ・ナメコのほだ木採取」と答えた数が六名あり、生活と結びついた森林資源の利用がうかがえました。写真6は八瀬地区の炭窯です。現在供出にあたっている自伐林家は供出開始前から何らかの形で森林資源との関わりを持っていたことを示しています。林家の年齢層は五〇代以上、特に六〇代に集中しており、これは現在よりも里山の資源利用が活発であった一九六〇～一九七〇時代に子供時代を過ごした層です。

気仙沼地域エネルギー開発株式会社が主催したフォーラムや林業実習は成果を上げており、自伐林家の林業技術向上に寄与していることがわかりました。自伐林家の年齢層は六〇代が中心であり、この年代は薪や炭の生産をはじめとする林業経験・森林資源の利用の経験がありますが、若い世代や林業経験はな



写真6 八瀬地区の炭窯

いもののバイオマス事業に関心を持つ人々も増えています。今後は幅広い世代や新規参入者の育成支援が一層重要になると考えています。

今後のバイオマス供出に向けて

リアスの森BPPにおいて重要だと思う理念(図5)については、「エネルギーの地産地消」や「地域経済の振興」のように身近で実感しやすいトピックが上位になっています。次いで「森里海連環の促進」、「CO₂削減による地球温暖化防止」、「震災復興」の順でした。「震災復興」が最後になっているのは、本BPP事業が具体的にどのような震災復興につながるのかがイメージしにくい、もしくは震災復興前後に関わらず継続される取り組み、という認識がある

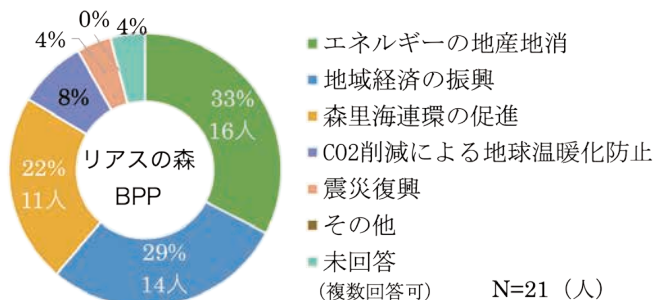


図5 リアスの森 BPP において重要だと思う理念

可能性があります。

今後のバイオマス供出意向については、四三%が供出増に意欲的であり、二九%が現状維持を希望しており、現状維持以上を意向として持つ自伐林家が合計七二%です。対して減量を希望するのが五%、供出自体の停止を希望するのが九%で、今後の材供出に対して後ろ向きな林家が計十四%です。バイオマス材の供出理由として最も多かったのは、従来の間伐よりもお金が入るようになったから(十三人)であり、次いで山の荒廃を何とかしなければという思いから(十二人)、木材を資源として活用したいから(一〇人)、事業の理念に共感するから(八人)、事業関係者の知人に頼まれているから(六人)の順になっています。気仙沼地域エネルギー開発株式会社が間伐材の市場価格の倍額で買取を進めていることの効果は大きく、林業の衰退に伴い荒廃する山林に対して問題意識を持っている林家が多くあります。自伐林家の年齢層が比較的高齢であり、若い頃

の森林資源との関わりの経験もあつてか、木材利用への関心の高さがうかがえます。人的ネットワークの強さが供出林家の数を増やすのに貢献しています。

供出に前向きでない理由は、年齢・体力的に厳しいが六一%を占め、労力に見合う報酬が少ない(二三%)に差をつけました。自伐を継続する跡継ぎの有無について、いると答えたのが四人(十九%)、いないと答えたのが十七人(八一%)であり、跡継ぎのいない林家が大半を占めました。現在主力として活動している世代から次世代への引き継ぎをうまく行うことが、将来的な材の安定供給において重要な課題といえます。また、間伐するペースが遅くなったという回答があり、その理由として「スギの間伐は終了した。マツは残っているが搬入場所が遠すぎる」「近くには木がなくなつた」などが挙げられました。零細な規模の自伐林家から継続的な供出を期待する上では、自身の所有山林の間伐終了後、自身の山林以外の共有林などでの林業への移行を促す必要があります。大規模な計画に基づく施業でないと補助金が給付されないなどの現行制度の課題を解決し、小規模林家が利用しやすい仕組みを整える必要があります。

おわりに

自伐林家の四分の三近くがこれまでに薪や炭の生産を行った経験があると回答しており、近年の森林の荒廃への関心はこうした経験に基づくものと推測できます。またプラントのメ

メンテナンスは地元の鉄工所が造船の技術を応用して行っており、これは港町気仙沼ならではのといえます。地域がコンパクトで人付き合いが密な地域だからこそ、事業に関わる各主体間のつながりが生かされ、事業推進にあたって必要となる業種に協力を要請しやすくなります。こうした「地域力」とも呼べるものを当事者たちが自覚し受け継いでいくことが、事業の継続にとって重要になると考えられます。

南三陸町における震災復興期の住宅移転と土砂災害危険区域の関係

三好 岩生・坂井 亜優

はじめに

東北地方の太平洋沿岸地域には山地が多く、急峻な斜面下の小規模な低平地に人家が集中する傾向がある。このことが東日本大震災時に津波によって甚大な被害を受けたことの要因の一つとなった。この地域では、急峻な斜面が多いことから、豪雨や地震を誘因とした土砂災害も多く発生している。自然災害の被害を防止・軽減するためには、津波だけではなく、様々な自然災害に備える必要がある。しかし、東日本大震災のような甚大な被害を与えた地震災害直後には、多様な災害にまでは思いを巡らすことができずに、地震・津波以外の災害危険地において土地利用が進むことがあった。東日本大震災後には行政主導で津波の災害危険区域を避けるような土地利用が進められたが、低平地以外は急峻な斜面が多いため、すべての自然災害の危険区域を避けた開発は容易なものではなかった。住戸をはじめとして様々な企業や工場、道路などのインフラが津波の災害危険区域を避けるように配置されたために、山

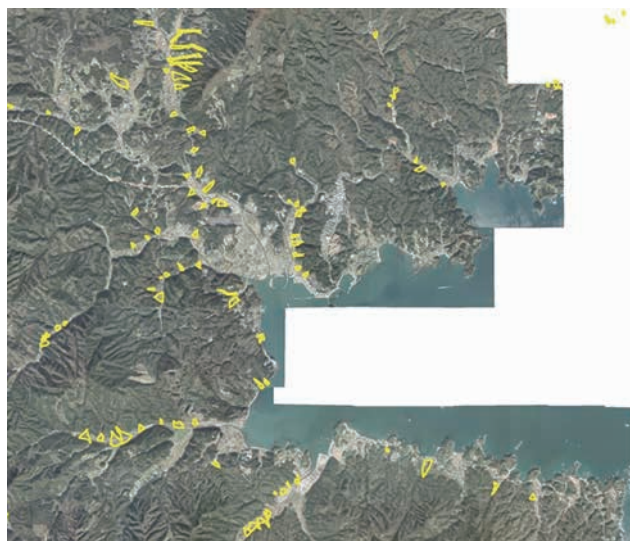


図1 旧志津川町域内の土砂災害警戒区域

腹斜面を切り開いた開発が多く行われ、低平地の地盤かさ上げと相まって海岸近くの街並みの景観は大きく変化した。また、必ずしもすべての住民が行政の開発方針の中で移住をしたわけではなく、個人的な移住先の選択が各種の災害危険地と重なることもあった。

土地利用の選択には、当然ながら防災への配慮だけでなく、様々な面での利便性やその土地への愛着が重視される。一八九六年の明治三陸地震や一九六〇年のチリ地震等に伴う津波の被害が出た後には、毎回沿岸部から高台へと人家の移動が行われた。しかし、災害後に年月の経過とともに危険性に関する認識は失われてゆき、生活の利便性を求めて再び沿岸部に住戸が移される傾向が明らかにされている。これは、漁港や農地、商業施設などが低平地に集中していること、および、行政

機関において津波に対する防災を考慮した都市計画が十分に考慮されなかったことが影響している。東日本大震災後には、津波だけでなく土砂災害や水害のハザードマップ（図1）が公表され、各種災害の危険性も考慮された。また、昭和期までの津波災害時と違って、高台においても水道、電気や道路などのインフラが整備されやすくなったことも高台移転を押し進める要因となった。ここでは、南三陸町の旧志津川町内において、いくつかの集落を事例として、東日本大震災前後の人家の移動様式と、土砂災害危険区域との関係をみることによ
り、災害後の街づくりにおいて多様な災害対策のために留意すべき事項について考えていく。

旧志津川町の自然的・社会的特性

旧志津川町は宮城県北東部に位置し、現在は二〇〇五年の平成の大合併により歌津町と合併し南三陸町として本吉郡に所属する唯一の町となっている。

旧志津川町は太平洋に面しており、沿岸部は志津川湾と伊里前湾で成り立つリアス式海岸である。旧志津川町の西部・北部・南西部は北上山地の支脈に連なっており、町土の約七〇%が山地・森林である。海岸線寸前まで山が迫っているため、住居は山と海の狭間に集中している。リアス式海岸の地形的な特性から津波の影響を受けやすく、貞観地震（八六九年）・明治三陸大津波（一八九六年）・昭和三陸大津波（一九三三年）・チリ地震（一九六〇年）を代表例とし、過去に幾度も津波被害を受けている（図2）。そのため沿岸部には防波堤や

防潮堤、水門などが設置されているが、東北地方太平洋沖地震（二〇一一年）では津波を抑えきれず甚大な被害を受けた。

南三陸町の二〇一五年時点での旧志津川町域の人口は九三五一人である。合併時（二〇〇五年）の志津川町の人口は一萬三三三〇人であり、東日本大震災を受けて人口が大きく減少している。

震災前後の人家の分布と 土砂災害警戒区域の関係

旧志津川町域において、昭和期以降の人家分布の変遷を把握するため、一九四七年、一九七五年、二〇〇八年、二〇一三年の空中写真から人家の位置を判読した。また、二〇一四年の地形情報をもとに、それぞれの人家がどのような地形の位置に立地した

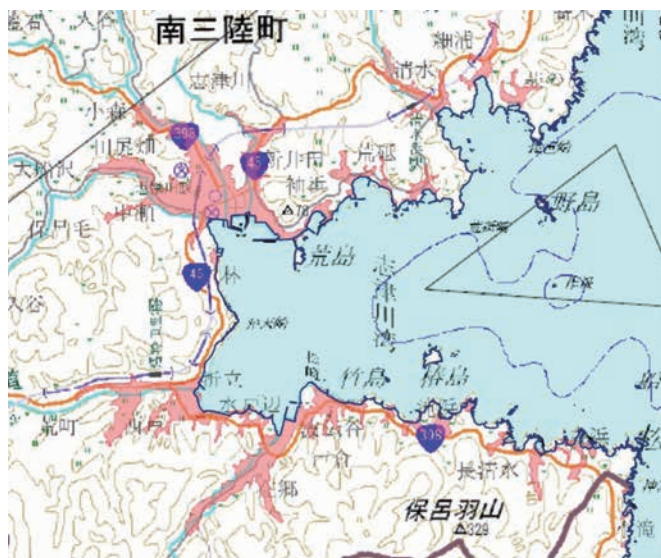


図2 旧志津川町域の東日本大震災時浸水範囲（南三陸町防災会議、2014）

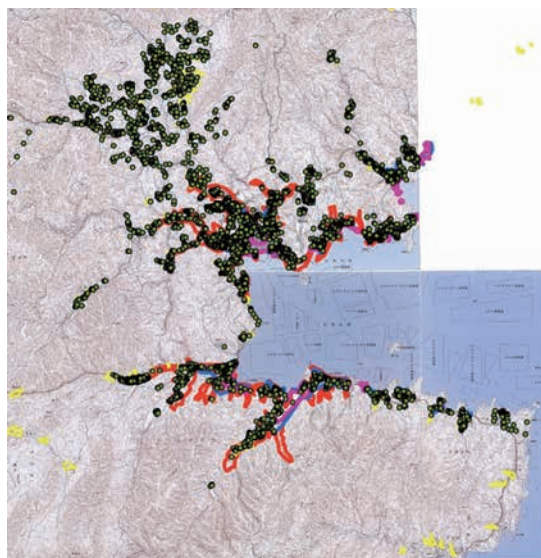


図3 2008年の人家位置と土砂災害危険範囲および津波被害範囲

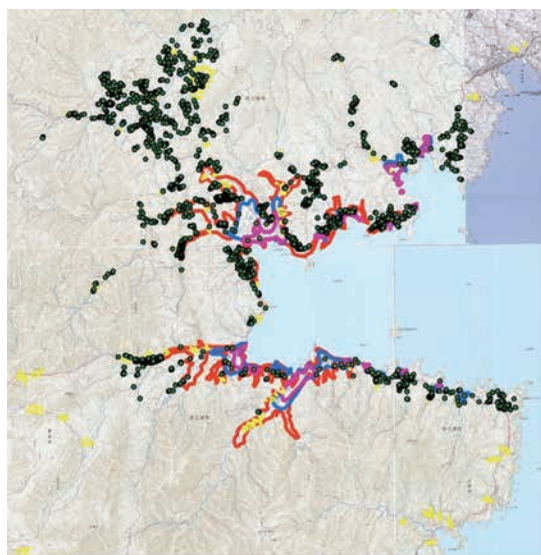


図4 2011年の人家位置と土砂災害危険範囲および津波被害範囲

のかを読み取った。

図3、図4は、それぞれ東日本大震災前後の人家の位置と津波の被害範囲、土砂災害警戒区域の分布を示している。これを見ると、震災前には人家が集中していた低平地から人家が消えて全体的には人家数が減少しているが、山間の谷沿いに震災後の新たな人家の増加がみられる。また、震災後の新しい住宅の一部は土砂災害警戒区域内に建てられていることがわかる。震災を受けて低標高地から人家が減少し、標高一〇〇〜六〇mの範囲に多くの人家が集

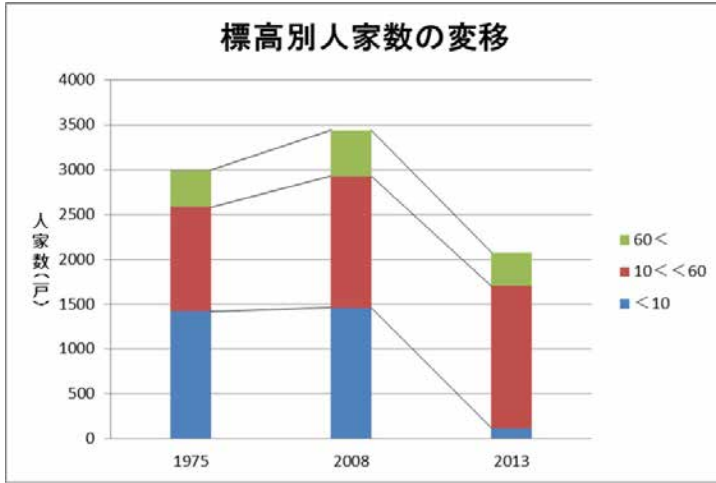


図5 標高別人家数変移

まっている(図5)。これには震災後の仮設住宅も一部含まれるが、多くは津波から避難し高台移転した家屋の増加が表されたものと考えられる。また、その標高一〇m以上六〇m未満の範囲内の人家数の推移を傾斜別に見ると五度以上十五度未満の土地に多くの人家が集中している(図6)。この、標高が一〇〜六〇mで傾斜が五度から十五度の範囲という地形は、土砂災害警戒区域が集中する地形でもある。津波による被害を受けた人家は津波から逃げるため標高の高い場所へ高台移転するが、その際に土砂災害の危険を十分には考慮していない場合があることが考えられる。

人家の移動様式

ここでは、東日本大震災を受けて、人家が新しく建てられた土地の特性を、荒町、黒崎、波伝谷の三つの集落を事例に詳しく見ていく。

〈荒町地区〉

荒町地区は志津川湾の南西部から流れ入る折立川に沿って存在する集落である。比較的古くから街道が完成しており住宅地としての歴史は長い。折立川の河口は細かく入組んだリアス式地形であるため津波被害が拡大しやすく、東日本大震災の際は内陸にまで津波被害が及んだが、荒町を目前に浸水域は留まった。津波による被害には遭わないものの住宅地の背後には急傾斜地が迫っており集落の大部分が土砂災害危険区域に指定されている。集落の人家のうち六割以上が土砂災害危険区域に存在している。さらに、津波の危険区域外であることから、津波で住宅の移転を余儀なくされたと思われる

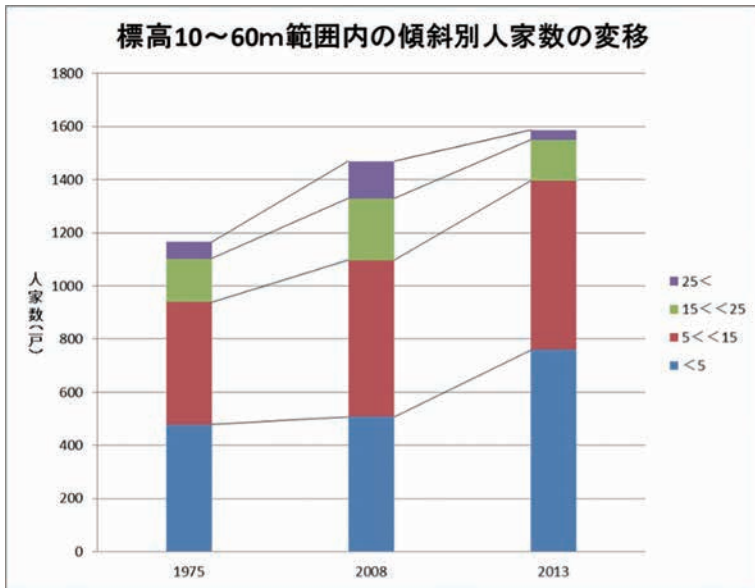


図6 標高10m以上60m未満範囲内の人家数の変化（傾斜別）



図7 荒町の人家分布 (1970)

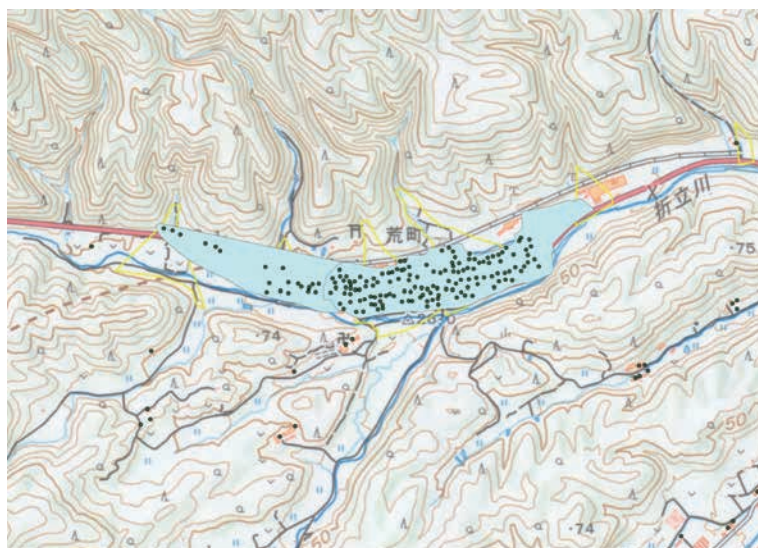


図8 荒町の人家分布 (2011)

る人家の移転先として、新しく住居が建設されている（図7、図8）。浸水域外かつ街道沿いの平坦地のため一見すると移転先として適しているが、細かい谷が多く集落の大部分が土砂災害危険区域となっている。

また荒町は、春先のフェーン現象の際に山の地形による逆転層の対流と相乗して出現する竜巻強風から、火災被害が多い。明治から昭和時代の八〇年間に三回の大火災が起こっており、さらに同時期に戦争も重なっている（佐藤、一九八五）。戦後のベビーブームや食糧事情による都会人の田舎寄留で人口は横這であるが、土地・経済の建直しは容易でなかった。

住宅地には扇状地が連なっており、扇端部は河川から水を得やすく平坦であるため集落には稲作を主生業とする住民が多く、そのた



写真 1 荒町 春日神社からの集落風景

め土地を離れる者は少ない。扇状部は未開発の雑木林であったが、戦後の土地開発により桑畑に変化し、ちょうどその頃に入谷から伝わった養蚕に適した環境となり人口増加へとつながった。昭和後期まで養蚕は栄えていたが、やがて衰退した。

東日本大震災後に荒町地区で新たに建てられた住宅は、行政主導の集団的な高台移転ではなく、個人的な移転である様子が見られた。荒町でみられたような個人的な移転の場合、住宅適地が新たに、大規模に開発されることはなく、必然的に既存集落の周縁部等において空いている緩勾配地を見つけて住宅を建てることになる。その結果として、川沿いや土石流扇状地の末端など、歴史的な経験から利用を避けられていた土地が宅地として利用されることになっている。

〈黒崎〉

黒崎は志津川湾西部に面した集落で、人家数は明治期以降さほど変化はなく、神社（黒崎不動尊）周辺に常に一〇軒前後である。沿岸に山がせり出し交通路の発達に不利な環境かつ



写真 2 荒町の土石流危険渓流出口に建てられた新築住宅

海食崖上に存在するため国道に出づらく、市街地と直線距離は近いが町の中心部への交通手段は乏しい。しかし、明治期以前より志津川地区と歌津地区をつなぐ街道の出入り口という要衝でもあったことから、常に一定数の人家があった。

沿岸地域ではあるものの津波被害は受けず、集落内を流れる川沿いには土砂災害警戒区域が指定されているが、その範囲内に人家はない。やや緩勾配斜面の谷が住居背面に迫っており、地形から判断すると土砂災害の危険性は十分にあるが、土石流危険溪流に指定された川沿いには黒崎不動尊が建っている。黒崎不動尊は黒崎が集落として成立した頃より存在しており、少なくとも五〇〇年間は同位置に残っている。そのことから住民は、黒崎不動尊よりも川から離れ、かつ高い位置は土砂災害の危険性が薄いことを推測して住んでおり、(図9)、それゆえに人家の移動が無いのではないかと推測できる。非



図9 黒崎の人家分布 (2011)



写真3 志津川湾から見た黒崎集落



写真4 500年以上土石流危険渓流沿いに建ち続ける黒崎不動尊

常に長期間にわたって土砂災害が無いことに加え、海面から標高差があつて津波の危険性もなく、傾斜地であるから水害の危険性もほぼ考えられない。ただし、集落全体がかなりの傾斜地であるがゆえに、新たに住宅を建てる土地を作るとは難しく、そのことが震災前後で人家の増減・移動が無かつた理由と思われる。

連なる谷を活かした棚田ではかつて稲作が盛んであつたが、時代の流れと共に農業は衰退し、また傾斜地で棚田を設けての農業は不利となり、過疎化につながっている。現在、かつて棚田であつた場所は雑木林になっている。地形的に大型車が通りづらいために大規模な土地開発は難しく、かつ交通の便も芳しくない。しかし条件不利集落であるとはいえ、山と海の両方の自然資源に恵まれておりコンパクトな資源循環が可能である。時代の変化と土砂災害に対応した土地開発を行うことで過疎化の緩和が期待できる場所であると考えられる。

〈波伝谷〉

波伝谷は志津川湾南部に面した漁村集落で、幾度も津波の被害を受けている。明治三陸津波は北東部より襲つてきたため海岸側（現在は国道）の人家は軒並み被害に遭い、これを契機に現在に連なる集落景観が形成された。昭和三陸津波では波高が比較的高くなかつたため人家へ被害は及ばなかつたが「地震があつたら津波の用心」と刻まれた記念碑が建立されている（志津川町誌編纂室、一九一一）。チリ地震では早朝より田仕事に出ていた住民が異変

に気付き大声で伝達に回り高台へ避難したため、人家は浸水したものの人的被害が小さく済んだ。しかし東日本大震災で住居はほぼ全滅した(図10・写真5)。避難した住民の多くは高台に移転した(図11)。強制力を伴う集団移転ではないが、行政の指導の下で二つの高台地区に住宅地が開発されて、震災で家を失った人たちの多くがこの高台に移住した。新しく開発された高台の住宅地は、山林に囲まれているものの緩勾配斜面のため土砂災害の危険度は低い。また、高台移転と共に、避難路が整備され、津波からの避難が容易に行えるようになっていた。これらの新しく開発された住宅地や道路は、現代の機械技術によって可能となったインフラ整備の上に成り立っており、過去の津波災害への対応とこの点が異なっている。高台での一定の規模を持つ住宅地や道路の開発は、地区の景観や住民の生活様式の変化をもたらすものである。



図10 波伝谷の人家分布 (1970)



写真5 東日本大震災直後の波伝谷集落（撮影：鈴木卓也氏）



図11 波伝谷の人家分布（2011）



写真6 波伝谷 高台に開発された住宅地に移転した住居

波伝谷における陸上・海上を含めた自然資源の利用法の変遷は非常に多様で、時代の流れに伴う経済状況の変化に耐えうる豊富な自然資源を持っている証であるといえる。波伝谷は古くより半農半漁の村であり、浜を所有しているものの多くの家が内陸に農地を持ち、農業と水産業を兼業している家が多かった。時を遡り江戸時代は、沿岸域では漁ではなく製塩が主産業であった。また、海岸近くまで山林が迫っているため、製炭業にも関わっていた。明治時代に突入すると入谷から養蚕業が伝わり、一九六〇年代までは主産業となった。この時期には仙台藩外から塩が流入するようになったため製塩業が廃れ、海資源の利用が大きく変化した。一九四〇年代には波伝谷まで舗装道が延びてきたため、換金率の高いアワビやウニをトラックで輸送することが可能となったため漁業が栄え

たと考えられる。さらに養殖技術の発達により、それまではノリのみであった養殖漁業がカキ・ワカメ（メカブ）・ホヤ・ホタテ・サケなど多種の養殖が可能となり、漁業および水産加工業が主生業となる運びとなった。現在も農業を専業とする家は一部あるものの、多くの家が養殖仕事の合間に田畑の手入れを行い自家消費分のみを生産としている。

東日本大震災後に開発された住宅地は、漁港や農地から遠く、その住人は自動車が無ければ移動できない環境になった。今後、地域の資源を生かした漁業や農業が衰退していくことが懸念される。

おわりに

本稿では、南三陸町の旧志津川町域を対象として、震災による住宅移転の様式と、その土砂災害危険地区との関係について、具体例を交えて見てきた。

住宅の移転様式には、いくつかのパターンがみられた。まず、荒町地区では個人的な移転がなされ、集落周縁部の空き地が利用されることから、土砂災害警戒区域内に人家が建設される危険性が高いという実態がみられた。黒崎地区では、急傾斜地で土石流の警戒区域に指定されているものの、五〇〇年以上にわたって土砂災害が無いという伝統知があり、標高差のために津波の被害もないことから、新規の住宅は設けられにくいのが、安定した集落の構成が続くものと思われた。それに対して波伝谷地区では、多くの人家が津波で流された後に、

行政の指導もあって、自然災害の可能性の低い高台に、ある程度の規模をもった住宅地開発がなされた。このような住宅地の開発は過去の災害時にはなかったものであり、地区の景観や住民のライフスタイルを新しくするものでもある。

このように、大規模災害後の人家の移転には、いくつかのパターンを見出すことが可能であり、そのパターンに応じて多様な自然災害への耐性が変わるものであった。またそのパターンに応じて、住民のライフスタイルや集落景観も変化していた。

大規模な自然災害は、災害発生時に大きな被害をもたらすだけでなく、その復興後の自然災害の危険性の変化をもたらす。また住民のライフスタイルや集落景観をも変えるものがあることから、復興計画には多様な災害ポテンシャルや住民の生活基盤についての中長期的な視野に立った十分な検討が必要である。

参考文献

- 南三陸町防災会議（二〇一四）…南三陸町地域防災計画津波災害対策編
 佐藤正助（一九八五）…志津川町物語、NSK地方出版
 志津川町誌編纂室（一九一一）…志津川町誌「歴史の標」
 山口弥一郎（一九四三）…津浪と村、三弥井書店
 山口弥一郎（一九六六）…津波常習地三陸海岸地域の集落移動 津波災害防禦対策実施状態の地理学的検討、
 亜細亜大学教養部紀要、一号
 山口弥一郎（一九九二）…東北地方研究の再検討、文化書房博文社

空からみる三陸海岸の里山・里海

王 聞・中井 美波・深町 加津枝

三陸海岸は、青森県南東部の鮫角（八戸市）から宮城県東部の万石浦（石巻市）まで、総延長六〇〇km余りの海岸です。岩手県宮古市を境として北部は海岸段丘が発達し、南部はリアス式海岸となっています。三陸海岸とその背後に広がる山地の自然の恵みを受け、豊かで多様な里山・里海の景観が形成されてきました。三陸海岸の一帯では、二〇一三年、東日本大震災により被災した三陸地域の復興に貢献するために「三陸復興国立公園」が創設され、同年には地域の里山・里海の継承を一つの目的とし、「三陸ジオパーク」が認定されました。

二〇二二年五月七日、一〇月十三日～十四日にかけて北部から南下し、岩手県九戸郡洋野町・宮古市・下閉伊郡山田町・大船渡市三陸町・宮城県気仙沼市唐桑半島にてドローン撮影を行いました。空から見ることにより、里山と里海が一体となった三陸海岸の風景としての特徴がより鮮明に伝わってきます。一連の海岸には独特な環境に適応した多様な海鳥や海岸植物が生息しており、日本有数の水揚げを誇る漁港もあります。また、集落の周辺にアカマツやカラマツ林、コナラやケヤキなどの広葉樹林、スギの植林地などといった豊富な森林資源が



図1 ドローン撮影地
(Googlemap 地図データ ©2023 に加筆し作成)

モザイク状に分布しています。海岸沿いなどで震災復興に取り組んでいる様子も見られます。三陸海岸の里山・里海の豊かな自然や文化の恵みを活かしながら、森・里・海のつながりを大切にしながら、これらに向けて新たに創造できる道筋を考えていきたいと思っています。

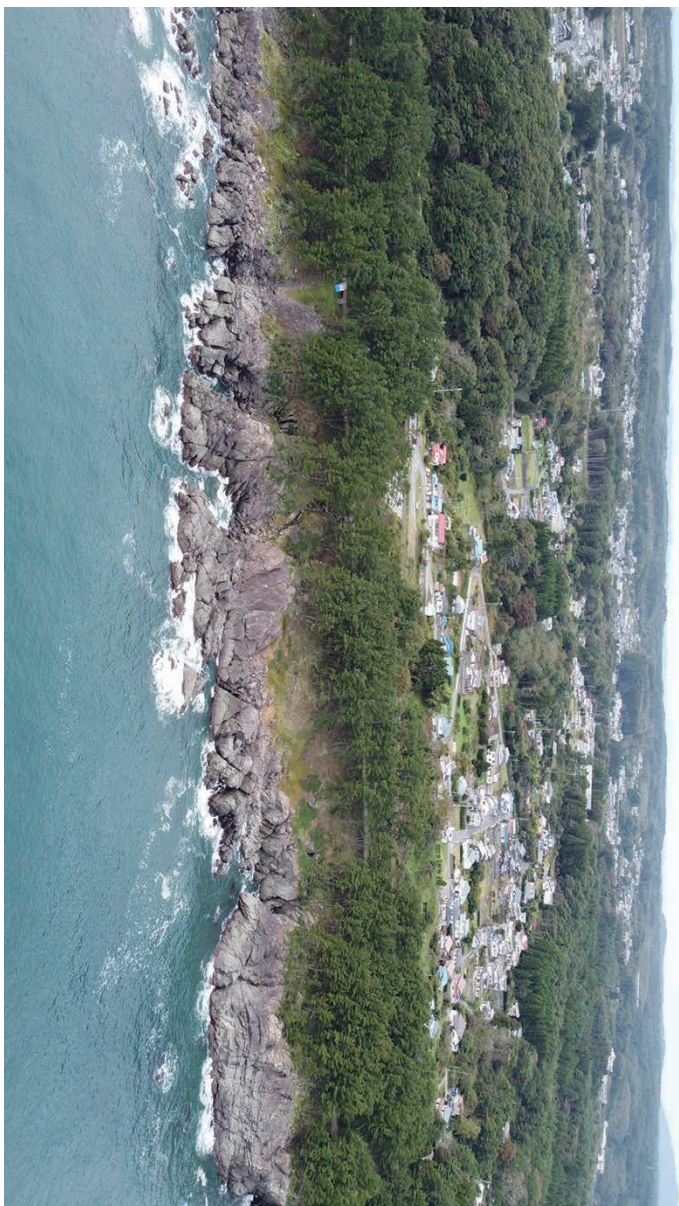


写真 1 洋野町の里山・里海の風景 (2022年10月13日撮影)



写真2 モザイク状のマツ林から洋野町の海岸へ (2022年10月13日撮影)



写真3 洋野町の海岸沿いにマツ林、広葉樹林、スギの植林地が見える (2022年10月13日撮影)



写真 4 三陸復興国立公園・三陸ジオパークの中心に位置する浄土ヶ浜は、
宮古の代表的な景勝地
(2022年5月7日撮影)



写真5 宮古のリアス式海岸と集落、その間に多様な森がある
(2022年10月13日撮影)



写真6 宮古の漁港、集落とその背後にある多様な森
(2022年10月13日撮影)



写真7 山田町の里山・里海の風景 (2022年10月13日撮影)



写真 8 山田町の牡蠣・ホタテ養殖と遠望の山々
(2022年10月13日撮影)



写真 9 山田町の海岸に近い集落の一隅と傍らにある防潮堤
(2022年10月13日撮影)



写真 10 三陸町の里山・里海の風景 (2022年10月14日撮影)



写真 11 三陸町のリアス式海岸を活かした里山・里海の風景と、遠望の水門と背後の山々 (2022年10月14日撮影)



写真 12 三陸町の集落とその周辺にある多様な森の様子 (2022年10月14日撮影)

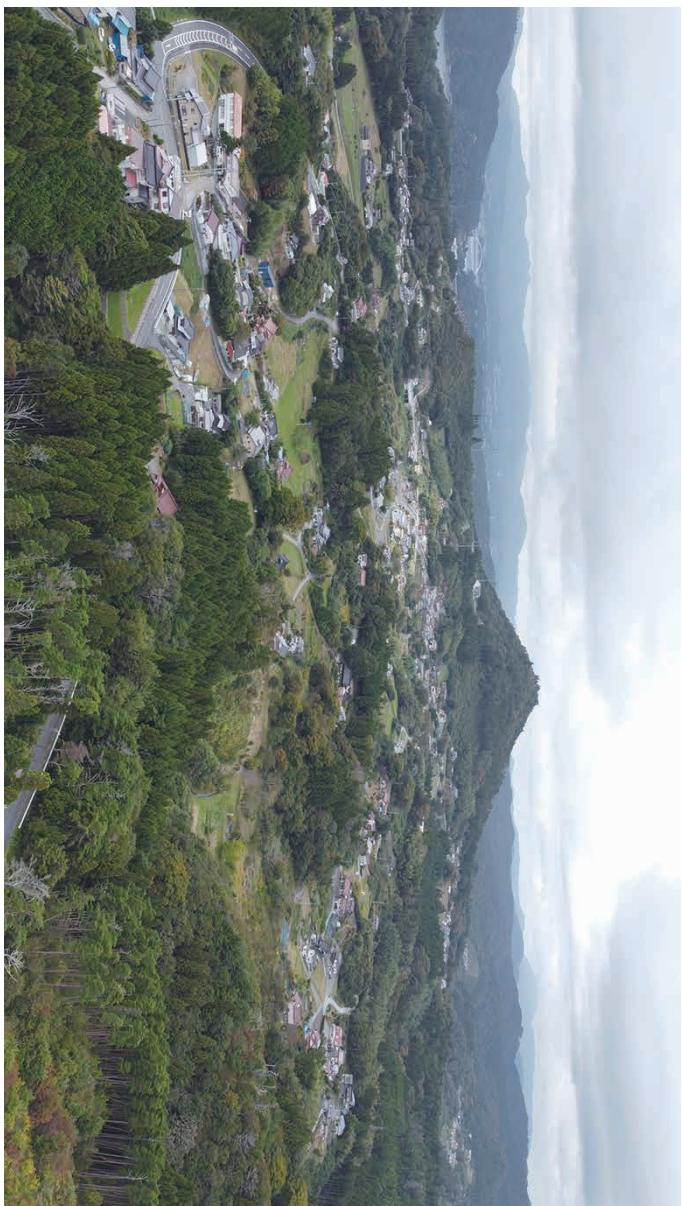


写真 13 唐桑半島の里山・里海の風景 (2022年10月14日撮影)



写真 14 唐桑半島からみる里山・里海の風景
(2022年10月14日撮影)



写真 15 唐桑半島のリアス式海岸。マツ枯れが進行している様子が見える
(2022年10月14日撮影)

三陸地域の里山・里海の恵みと震災復興

深町 加津枝

二〇一一年三月十一日の東日本大震災から十二年目を迎えました。今日までに三陸地域の里山・里海の豊かな自然、文化を保全、再生、創造するための様々な取り組みが広がっています。一方、震災復興はまだまだ途上であり、生活再建、地場産業の振興、防災・減災計画などの観点から様々な課題を抱えています。地域固有の豊かな自然や文化が消失、あるいは大きく変化していることへの警鐘を受け止め、今後に向けて震災復興や地域づくりの方向性を再確認する必要があります。そのためには、震災前から震災直後までの地域の状況や行政施策など、具体的な事例に基づきながら丁寧な検証を重ねることが重要だと考えます。

本冊子では、震災前後の三陸地域における里山・里海の恵みを活かすための取り組み、復興事業や防災・減災対策に焦点を当てました。そして、地元住民と外部の研究者の視点、現場のヒューマンスケールとドローン写真を用いた空からの視点を組みあわせながら、里山・里海と人々のかかわりを捉えられるよう冊子の編集を進めました。震災を経験した人々の証言や記録から、被災時適応力を高める上で重要となる里山・里海とのかかわり方やライフス



写真1 奇跡の一本松と防潮堤（陸前高田市）



写真2 気仙沼市八瀬地区の里山



写真3 気仙沼市八瀬地区の河童

タイル、地域コミュニティのあり方などが示唆されました。気仙沼市内の「スローフード気仙沼」や「リアスの森BPP（バイオマスパワープラント）」は、新たな価値観や仕組みを取り入れながら、身近な自然資源を持続的に利用する新たな地域づくり、ビジネスの実例となっていました。「八瀬森の救援隊」の自伐林家へのアンケート調査からは、林業やキノコ・山菜採取などの伝統知や技術が木質バイオマス事業を進展させる鍵となるとともに、新たな主体の存在や普及・啓発が今後の事業に不可欠であることがうかがえます。大規模で一律な物流、エネルギーの流れを基本とする「大規模傘下型」に頼るのではなく、自己完結と相互

補完の組み合わせを基本にした災害に強い「小規模ネットワーク型」の自然資源の利用が求められます。

東日本大震災のような非常時において情報共有や復興計画が一部の人で進められたことによる弊害として、地域内での感情のもつれや時間と共に大きくなる地域差が指摘されました。巨大防潮堤の建設や地盤沈下など、復興事業が進む中で取り残されていた地元の物理的、精神的な痛みも大きな問題と言えます。また、南三陸町における調査では、東日本大震災後に人家位置が海側から内陸の急傾斜地、土砂災害危険範囲に移動している実態が示されました。分散して山側に人家を移転させる施策は、津波による被災リスクを軽減させる一方、土



写真4 リアスの森 BPP (気仙沼市)



写真5 八瀬・森の救援隊と学生らの交流会



写真6 三陸復興国立公園
(宮古市浄土ヶ浜)



写真7 南三陸町入谷の川の流れ



写真8 南三陸町歌津館浜



写真9 三陸海岸サップ船
(大船渡市碁石海岸) 左：筆者

砂災害という別の災害リスクを高める場合があります。里海と密接にかかわってきた暮らしや生業、人のつながりの消失は、長年にわたって培われてきた地域文化にも大きな影響を与えると考えられます。東日本大震災から十二年目。これからの里山・里海に暮らす人々の暮らし、生業はどのような未来に向かつていくのでしょうか。震災復興と地域コミュニティの実情に真摯に向かい合いながら、里山・里海の多様で豊かな恵みを活かした復興のあり方、社会の仕組みのあり方を見出していく必要があるでしょう。

参考文献

- 深町加津枝 (二〇二二) OECMとしての里山・里海、環境情報科学51(4)
Fukamachi, K., Waranabe, T., 2022, Satoumi: Prolonged interaction between humans and nature. In "Routledge Handbook of Seascapes" ed) Gloria Pungetti, Routledge

吉田 文人 (よしだ たけひと)

所 属 総合地球環境学研究所・東京大学大学院総合文化研究科

専門分野 生態学、陸水学

主な著書 『実践版!グリーンインフラ』(共編著・日経 BP, 2020年)、『シリーズ地域の歴史から学ぶ災害対応』(共著・総合地球環境学研究所, 2019年～2023年)、『プランクトンのえほん』(監修・ほるぷ出版, 2017年) など

深町 加津枝 (ふかまち かつえ)

所 属 京都大学

専門分野 造園学、景観生態学

研究テーマ 地域固有の景観保全、活用のあり方、里山の人と自然のかかわり

主な著書 「森林に関する伝統的知識」「流域文化の継承」「伝統の継承と活用・土地利用」(日本景観生態学会編『景観生態学』, 共立出版, 2022)、Fukamachi, K. (2022) SATOYAMA LANDSCAPES -Creating resilient socio-ecological production landscapes in Japan."Creating Resilient Landscapes in an Era of Climate Change: Global Case Studies and Real-World Solutions" edited by Amin Rastandeh and Meghann Jarchow, Routledge など

大崎 理沙 (おおさき りさ)

所 属 株式会社 樽徳商店

専門分野 環境デザイン学

主な活動 京都大学大学院修了後、商社の業務の一環として、生産者の顔の見える食材を直接、消費者へ届ける仕組みをつくり、その運営を行なっている。酒樽屋に始まる会社の歴史を引き継ぐため、桶づくりや木工の技術習得にも取り組んでいる。

高橋 正樹 (たかはし まさき)

所 属 株式会社 気仙沼商会

専門分野 商学

主な活動 2011年の震災後、気仙沼市震災復興市民委員会プロジェクトのリーダーとして、復興に向けた提言をまとめた。2012年には、豊かな森林を活用した再生可能なエネルギーをつくることで街づくりを行うため、気仙沼地域エネルギー開発株式会社を設立する。地域全体のエネルギー自給を実現するために、木質バイオマスプラントを稼働させ、NPO法人リアスの森応援隊の活動を広げるなど、地域内循環を目指した新しい取り組みを進めている。

三好 岩生 (みよし いわお)

所 属 京都府立大学

専門分野 砂防学

研究テーマ 土砂災害の防止、溪流環境の保全、自主防災活動

主な著書 『地域の歴史から学ぶ災害文化：比良山麓の伝統知・地域知』（共著・総合地球環境学研究所，2019年）、環境保全と交流の地域づくり（共著、昭和堂、2000年）

王 聞 (わん うえん)

所 属 京都大学

専門分野 造園学、景観生態学

研究テーマ 地域固有の景観保全・活用のあり方、里山の人と自然のかかわり

主な著書 『地域の歴史から学ぶ災害対応 砺波平野庄川流域の散村と伝統知・地域知』（共著・総合地球環境学研究所，2022年）

謝辞：

本研究を進める上で、岩手県大船渡市、陸前高田市、宮城県気仙沼市、南三陸町の関係者の皆さまには大変お世話になりました。現地の調査では、多くのことをご教示いただき、執筆、インタビューに快く応じてくださった方々には多大なご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表し、厚く御礼申し上げます。また冊子の編集にあたっては、大原歩さん、中井美波さん、王聞さんに尽力いただきました。心より感謝を申し上げます。

人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト
「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」
地球研ユニット：自然の恵みを活かし災いを避ける地域文化研究
地域文化を支える人・社会・自然のつながり Vol.1
三陸海岸の里山・里海からのメッセージ

発行日／2023年3月20日

編集／深町加津枝

発行／人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト

「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」

印刷／有限会社 礼書房

ISBN：978-4-910834-16-0



地域文化を支える人・社会・自然のつながり

vol.1 2023年3月

目次：

- はじめに 吉田 丈人
- 1、三陸地域における里山・里海の暮らしと震災対応
深町 加津枝・大崎 理沙
- 2、「スローフード気仙沼」の立ち上げから震災復興まで 高橋 正樹
- 3、気仙沼「リアスの森 BPP」と関わる自伐林家の意識
大崎 理沙・王 聞・深町 加津枝
- 4、南三陸町における震災復興期の住宅移転と土砂災害危険区域
の関係 三好 岩生・坂井 亜優
- 5、空からみる三陸海岸の里山・里海
王 聞・中井 美波・深町 加津枝
- 6、三陸地域の里山・里海の恵みと震災復興 深町 加津枝